真言宗綱要

眞言宗綱要

浦上隆應和上著

眞言宗聯合大學黌藏版

明治
38 4 25
交内

眞言宗綱要

日次

第一章　序說……一
第二章　法脈相傳
第一節　根本相承……五
第二節　法流の分派……一四
第三章　所依の經典
第一節　緒言……一八
第二節　兩部大經……二〇
第三節　能說の敎主＝本地身＝加持身……二三
第四節　大日釋迦二佛の同異……二四

第五節 秘密大經と百億契經との說時……二六
第六節 兩部大經の結集……二八
第四章 立敎開宗
第一節 立敎
其一 顯密二敎の對辯……二九
其二 十住心の建立……三三
第二節 宗名……四五
第三節 宗憲……四七
第四節 宗義
其一 即身成佛の義＝理具＝加持＝顯得……五一
其二 體相用三大の義……五七
其三 諸法の緣起

一 序意列名……六一
二 神我の變造を破す……六一
三 六因四緣の說……六八
四 阿賴耶緣起……七六
五 眞如緣起……八〇
六 六大緣起……八二
其四 兩部曼荼羅の建立
一 總說……八四
二 金剛界……八七
三 胎藏界……九二
其五 四種法身……九五
其六 神祇の實相……九九

其七　字相字義……一〇〇
其八　釋摩訶衍論の梗概
一　五分の建立……一〇六
二　三門の顯密—不二門—眞如門—生滅門……一一三
其九　教の機根……一一六
第五章　修證門
第一節　發心受戒
其一　發心……一一八
其二　受戒……一二一
第二節　練行……一二五
第三節　所得の三品悉地—上品法身—中品報應—下品等流……一三〇

第四節　十緣生句の觀門……一三一
第五節　不斷而斷の妄執……一三七
第六節　無階級の階級
其一　六無畏……一三九
其二　十地……一四三
其三　三句と五轉……一四六
第七節　無盡の悲願……一五一
第六章　結論……一五二

眞言宗綱要目次終

佛法離諸相　法住於法位　所說無譬類　無相無爲作
何故大精進　而說此有相　及與眞言行　不順法然道
爾時薄伽梵　毘盧遮那佛　告執金剛手　善聽法之相
法離於分別　及一切妄想　若淨除妄想　心思諸起作
我成最正覺　究竟如虛空　凡愚所不知　邪妄執境界
時方相貌等　樂欲無明覆　度脫彼等故　隨順方便說
而實無時方　無作無造作　彼一切諸法　唯在於實相
復次秘密主　於當來世時　劣慧諸衆生　以癡愛自蔽
唯依於有相　恒樂諸斷常　時方所造業　善不善諸相
肓冥樂求果　不知解此道　爲度彼等故　隨順說是法」
(大毗盧遮那經)

眞言宗綱要

高野山眞別處　隆應述

第一章　序說

夫れ太虛寥廓として。大千中に現じ。世界海森羅として。群生茲に居す。或は上りて欲、色、無色の天樂に耽り。或は下りて叫喚寒熱の猛苦に泣く。樂に耽る者は遂に發奮の機なく。苦に泣く者は遂に聞法の時なし。皆共に道に入るべからず。只人間の閻浮洲。善惡錯綜。苦樂參差。能く厭求の心を起し。又丈夫の志を立つ。三世の諸佛此處に成道し。十方の賢聖此處に應現す。良に所以ある哉。

蓋し生死の大海は。罪惡の水を因とし。罪惡の波濤は三毒の

風を緣とす。三毒三にあらず。一個の無明なり。無明は是れ神心膏肓の病。耆婆も七を投じて嗟嘆し。扁鵲も手を束ねて憮然たり。只我大覺醫王のみありて。此妙藥を與へ。此病根を拔き。一切衆生をして。蘇息の思を爲さしむ。病態既に千狀なれば。方藥亦萬殊あり。曰く華嚴。曰く阿含。曰く方等。曰く般若曰く法華。曰く涅槃。此を顯藥と云ふ。病に應じ機に適すれば。効驗立どころに顯る。而も尙ほ是れ。迂曲の方藥にして。未だ以て其靈妙を極めず。爰に一の大醫王あり。號して摩訶毘盧遮那法身如來と云ふ。三世常恒に法界宮殿に住して。自眷屬と共に。遍一切乘眞言陀羅尼門の秘法を宣說し。速疾頓悟の妙藥を施設す。若し宿殖深厚一聞千悟の衆生ありて。一たび此芸(かほり)を齅がば。無明の宿痾頓に滅して。不二の智體を顯はし。三

毒忽ち變じて。三德と成り即身成佛の大利を獲む。初め竺土に起り。中ごろ震旦に渡り。七祖嫡々相承して。遂に我高祖弘法大師に至る。大師は本これ槐林の俊髦。夙に塵を厭ひ淸を欣び歲二十出家して諸敎の蘊奧を窮め。三十一にして入唐し。靑龍寺惠果和尙に隨て。兩部の大法。及び百餘部の密軌を受け。入室瀉瓶事了りて歸朝す。幾くもなくして法幢を建て宗旨を聞き。或は紫震殿上に佛光を放ち。或は神泉苑裏に法雨を降らす。書を著はして王侯を導き。山を開きて子弟を訓ふ。宗風維れ揚り。敎綱維れ張る。普天率土。今尙ほ其風を慕ひ其德を仰ぎて衰へず。是れ高祖の神力遙に古今を拔くものあるに由ると雖も。抑々又斯敎の深妙遠く餘敎に超ゆる所のものあれば也。

高祖入定以來。星霜を閲すること。殆んど一千七十年。其中間隆替興亡無きに非ずと雖。師資相傳へて以て今日に至り。寺院一萬以上。僧侶の數之に契ふ。亦盛んならずと謂ふべからず。南嶺は巍峩として雲に聳え。東塔亦嶄然として空を衝く。根泉の水は常に千古の清を映つし。仁醍の花は長へに萬古の芳を傳ふ。然るに獨り恠しむらくは其法音のみ。杳として聞ゆることなきを。嗟乎天運常なく環りて止まざるが故に是の如く衰へたるか。人心恒なく時勢を逐ふて歸らざるが故に是の如く濫れたるか。教藥古びて病に適せざるが故に。是の如く棄りたるか。予自ら知らず。仰て天に問ふ。天は蒼々として答へず。俯して地に問ふ。地は墨々として言はず。進んで此弊を矯むるに由なく。退て此寶に安んずる能はず。遂に

禿筆を呵して以て其一班を寫す。

第二章　法脈相傳

第一節　根本相承

本宗祖々傳來の法脈。其淵源尤も深し。初め法身毘盧遮那如來。世界海に遍滿して。自眷屬と自受法樂の爲に。三世常恒に眞言陀羅尼教を宣說す。楞伽に『所謂法佛の說法とは。心相應の體を離れたるが故に。內證聖行の境界なるが故に。大惠是れを法佛說法の相と名く』と云ふ即ち是なり。其所說の眞言陀羅尼教。之を稱して大日經及金剛頂經と云ふ。斯法甚深微妙にして。能く諸の四重。八重。五無間罪。謗方等經。一闡提等の種々の重罪を造れる。强剛難化の衆生を度して。頓に無明業障を消滅し。速疾に佛位を證せしむ。故に金剛般若には。號し

て最上乘と爲し。惠果和尙は嘆して。冒地の得難きに非ず。此教に遇ふの易からざれはなりと云ふ。良に吾を欺かざるなり。斯法を我國に傳ふるや。總して八家あり。所謂東寺家に五。曰く弘法大師。曰く宗叡僧正。曰く惠運僧都。曰く圓行和上。曰く常曉和上是なり。天台家に三。曰く傳敎大師。曰く慈覺大師曰く智證大師是なり。以上八家の中。特に我高祖は其正傳を得たり。故に惠果和尙の言に曰く『我先きより汝か來ることを知れり。相待つこと久し。今日相見ること太た好し。報命闕へなんとす。付法に人なし。今則ち授くるに。兩部の祕奧壇儀印契を以てす。漢梵差ふことなく。悉く心に受けたること。猶ほ瀉瓶の如し』と。以て其付屬の尋常ならざるを見るべし。茲に我高祖。惠果和尙の室內を盡して。大同元年に歸朝し。其請來

する所の。一百餘部の金剛乘敎。及び兩部大曼荼羅、佛舍利、寶器を具して魏闕に奏上し。立敎開宗して。眞言陀羅尼宗と稱す。是れ本宗の我國に傳播する濫觴たり。今順序を逐ふて傳燈列祖の芳躅を聯ねん。

第一祖法身毘盧遮那如來。　自眷屬の金剛薩埵等と。法界宮。及眞言宮殿等の中に於て。自受法樂の爲に。三世常恒に。此自內證の三摩地法を說く。具には金剛頂經等に說くが如し。

第二祖金剛薩埵。　又常に法界宮殿等に住し。親しく大日如來に對して。灌頂の職位を受け。如來の敎敕に依り。兩部の大經等を結集し。南天鐵塔の中に安住して。其時機を待つ。

第三祖龍猛菩薩。　釋尊滅後八百年中に出づ。此菩薩跡を歡喜地に垂ると雖。其本を尋るに妙雲相如來(阿彌陀)なり。初め外

道に同じて。其法を究め。後ち內道に入りて上四王自在處より下海中龍宮に至るまで。所有る一切の佛教を誦持し。千部の論を造りて。邪を破し正を顯し。遂に南天の鐵塔中に入りて親しく金剛薩埵に對し。其灌頂を受け。此眞言教を誦持して廣く世界に流傳す。楞伽經、摩耶經等に。如來の懸記したるは則ち此人なり。

第四祖龍智菩薩　是れ龍猛高足の弟子にして。深く密藏の奧義を極め。廣く顯乘の諸部に通じ。位聖地に登り神力難思なり。年七百歲に至るまで。密乘を弘通し。衆生を利益し。其德五天を覆ひ。人天の景仰する處たり。

第五祖金剛智三藏　南天竺の人なり。年卅一にして。龍智菩薩に承事し。七年を經て兩部大經を受學し。且つ諸大乘教を

習へり。後金剛薩埵の指示に由り。弟子不空を伴ひて。唐の開元八年に彼土に來り。廣く密教を流布し。金剛頂瑜伽等の經卷を翻譯し。玄宗皇帝の歸依を受け。種々の靈驗を顯はせり。

第六祖不空三藏　南天竺の人、年始めて十四にして。金剛智三藏の弟子と爲り。二十餘年左右を離れず。其師に隨て唐土に來り。悉く秘密の法門を受け。金剛智示寂の後。天竺に歸り。龍智菩薩に遇ひ。兩部二十萬頌の大經を受け。入室瀉瓶の後。再び唐土に來り。玄宗。肅宗。代宗の歸仰尤も厚く。所傳の經卷を翻譯すること。凡そ一百餘部。廣く密教を弘通し。種々の法驗を顯はす。密教の翻譯。此祖に至つて完備すと云ふ。

第七祖惠果和尙　唐土の人なり。幼にして英靈、大照禪師に從て。不空三藏に見ゆ。三藏一たび目て密藏の器と稱し。後三

摩耶佛戒を授け。灌頂の職位を許し。口づから大佛頂。大隨求等の密典を授く。孜々として三藏を精研し。顯密に該通せり。遂に兩部の大法毘盧遮那根本傳法密印を授けらる。不空三藏告げて曰く。吾百年の後。此大法を持して。國家を鎭護し。有情を利益せよ。吾弟子數多しと雖。汝か聰利精勤なるを愍んで。許すに兩部の職位を以てす。努力〳〵。精進して佛恩を報ぜよと。後果して宗風大に揚り。代宗、德宗、順宗の三帝。皆師として以て灌頂を受く。後我弘法大師を得て其法を襲がしめ。唐、永貞元年十二月十五日奄然寂を示す。

第八祖弘法大師　諱は空海、俗姓は佐伯、讃州多度郡屏風浦の人なり。幼にして聰明英智。神童を以て稱せらる。年甫めて十五。上京して大學に入り。直講味酒淨成及び岡田博士に就

て俗典を研鑽し。後漸く其淺膚にして道とするに足らざるを知り。大に心を佛乘に寄す。石淵の勤操僧正に隨て。求聞持法を受け悉地成滿す。それより塵濁を厭ひ巖藪を飢ふ心ます〳〵深く。三教指歸一篇を著はして。其志を陳べ。年二十にして泉州槇尾に至り。勤操僧正に隨て剃染し。沙彌戒を受け名を教海と稱す。時に延曆十二年なり。同十四年東大寺戒壇に於て進具す。後佛前に誓願して曰く。『吾佛法に於て常に其要を求む。三乘、五乘、十二部經。心神に疑あり未だ以て決と爲さず。唯願くは三世十方の諸佛我に不二の法を示し給へ』と夢に人あり告けて曰く。此に經あり名字を大毗盧遮那經といふ。是れ汝が求むる所なりと。師大に歡喜し之を尋ぬるに果して大和國高市郡久米道場東塔の下に之を得たり。蓋し

善無畏三藏。養老年間我國に來り。此經を傳へんと欲せしも、未だ其機緣の熟せざるを見て。之を塔內に安置し去りたるものなり。大師普く披見するに。衆情滯あり。彈問するに師なし。遂に志を決して朝に奏し。延曆二十三年五月遣唐使藤原朝臣賀能に隨て入唐し。靑龍寺惠果和尙に見ゆ。兩部の大法。一百餘部の諸尊法。及不空三藏傳付の物。幷に供養の道具等。悉く附屬せられ。大同元年歸朝す。遂に朝野の歸仰を受け。一宗を建立して眞言宗と云ふ。傳敎大師首として灌頂を受け。平城、嵯峨、淳和、仁明の四帝亦受法の禮を取り。皇后皇子九卿百官及び四方萬衆。歸仰せざるなし。弘仁十四年東寺を勅賜せられしより。或は神泉苑に祈雨して萬民を潤澤し。或は宮中後七日の御修法を創めて國家の隆盛を祈り。或は高野室

生の榛莽を披きて徒弟薰育の地となし。或は池沼を堀りて民に灌漑の法を敎へ。或は數十部の論章を顯はして宗義を闡明し。或は「いろは」を造りて。文字を學ぶの便を與へ。書畫彫刻筆墨の製造に至るまで。細大漏すことなく。悉く其道の鼻祖として。敎を後昆に垂る。久遠實成の大聖。其本誓に乘じて。此土に同塵すと云ふも。決して過稱にあらざるなり。承和二年三月二十一日。南嶺の禪窟に入定す。世壽六十二。延喜二十一年十月二十七日。醍醐天皇勅使を高野の禪窟に遣し諡號を賜ふて弘法大師と曰ふ。

以上通じて付法の八祖と爲す。此他に善無畏三藏は。法を龍智菩薩に受け。唐開元四年。大日經の梵本を齎持して。其徒一行と共に譯して七卷とし。之を門弟に講授し。一行之

を筆記して二十卷の疏を作れり。是れ本宗所傳の經疏中に重を爲すものなり。故に善無畏、一行の兩師同じく密教傳持の祖なれども正脈中に列次せざるは。蓋し所由あり知らずんばあるべからず。

第二節 法流の分派

高山幽壑巒峯極めて夥しく。長河大流分派甚だ多し。我宗開教以來。年を經ること既に一千有餘。多少の分派を爲す。亦免れざるの數か。蓋し高祖付法の弟子に十哲あり。曰く眞濟。曰く眞雅。曰く實慧。曰く道雄。曰く圓明。曰く眞如。曰く杲隣。曰く泰範。曰く智泉。曰く忠延是なり。就中實慧。眞雅の兩德は其上首なる者。二師の系統今尙綿々たり。殊に眞雅は尤も諸派の根本と爲る。眞雅付法の資に南池院源仁あり。源仁の下に二

傑を出す。曰く益信。曰く聖寶是なり。聖寶は小野流の初祖と成り。益信は廣澤流の初祖となる。

廣澤流は益信僧正より出つ。益信は即ち本覺大師なり。法を寬平法皇に傳へ法皇之を寬空に傳へ寬空之を廣澤の寬朝に傳ふ。廣澤の流名此に始まる。寬朝の資濟信。濟信の資性信、性信は即ち長和親王なり大御室と號す。大御室の資は則ち寬助。寬助に資七人あり各一流の祖となる。一に曰く御流覺法親王。二に曰く西院流信證。三に曰く保壽院流永嚴。四に曰く華藏院流聖惠。親王五に曰く忍辱山流寬遍。六に曰く傳法院流覺鑁。覺鑁は即ち興教大師なり。之を略稱して廣澤の御、西、保、華、忍、傳、の六流と謂ふ。七に曰く眞譽即ち高野持明院流の祖なり。

御流覺法の資に覺成あり。覺成の資に隆遍あり。隆遍新に一派を出して慈尊院流と曰ふ。又大御室性信の資に寛意あり。寛意兼意に傳へ兼意心覺に傳ふ。心覺常喜院流の祖となる。以上廣澤流分れて九派となる。若し之に金玉方の寶壽院流。幷に成就院流を加ふれば總て十一派となる。

小野流は聖寶僧正より出づ。僧正は醍醐山の開基にして。南都の七大寺を管轄し。顯密の奥義を盡し。大に宗風を振興せり。後諡して理源大師といふ。其資に般若寺の觀賢あり。觀賢より淳祐。元杲を經て仁海に至る。仁海山科の小野に住す。小野流の名此に始まる。仁海の資成尊。成尊の資三人あり。曰く範俊。曰く義範。曰く明算是なり。範俊の資嚴覺。嚴覺の資三人あり。各々一流の祖と爲る。曰く安祥寺流宗意。曰く勸修寺流

寛信。曰く隨心院流增俊是なり。義範の資勝覺。勝覺の資三人あり。各一流の祖となる。曰く三寶院流定海。曰く理性院流賢覺。曰く金剛王院流聖賢是なり。之を略稱して小野の安、勸、隨、三、理、金、の六流といふ。明算は高野中院流の祖となる。

般若寺觀賢の資に一乘律師あり。其資定助より、法藏、仁賀。眞興相傳へ。眞興小島流の祖と爲る。又三寶院勝覺の資定海より元海。一海相傳へ。一海松橋流の祖と爲る。一海の資に雅海あり。其資全賢より淨眞、賴賢、眞憿、俊譽、公紹、信惠を經て。叡尊に至る。叡尊は即ち興正菩薩なり。四分律再興の高德にして。西大寺流の祖となる。以上小野六流外の四流なり。合せて十流となる。是の如く小野廣澤の諸流其末益々別れて七十餘派と成る。之を法流の分派とす。是れ乃ち高祖門弟の機に隨

ひ傳授の方便均しからざるに基因する乎。或は門弟性欲を異んじて。所傳の法を見解するの差あるに因る乎。殊に賴瑜法印の如きは。敎相に於て如持身敎主の說を主張し。後世之を傳承して一脈を興せば。一見大に舊流と異んずるものに似たれども。是れ只法爾隨緣不二の中より。機宜に任せて加持隨緣を顯揚するもの也。斯く事敎に涉りて。種々に分派し。其談勝劣なきにあらざるも。共に等しく裂裳金斷の謂のみ。敢て彼此を論ずべきにあらず。然るに後世に至りて互に彼此の見を張り。兄弟墻に鬩ぎて。家運を傾くるが如きあらば。決して先哲の本意にあらざるべし。

第三章　所依の經典

第一節　緒言

本宗は大日如來。親ら宗名を建てゝ。眞言陀羅尼宗と稱し。自己內證の法門を宣布するものなれば。顯敎諸宗の如く。如來の滅後經典を摸索し。人師の自ら工夫して宗義を立て。跼蹐として其規準に從はんとする者とは。亦同日の論に非ず。故に我宗は元來所依證據の經典を立てざるを本意とす。看よ彼の觀行即に位する天台大師すら尙ほ謂ふに非ずや。『已心所行の法を演ぶ。幸に修多羅と合す』と。況んや本地究竟の如來。自己內證の法門を宣布するに。豈に所依の經典を假りて。他の疑惑を解くの要あらんや。只後世の末徒。兩部大經を以て。佛祖心傳の印璽として。之を傳習するのみ。他宗の其經典に於けるが如く。所依として。規模を此に取り信を證するものと混同視すること勿れ。

第二節　兩部大經

高祖曰く『眞言密敎兩部秘藏は。是れ法身大日金剛法界宮及眞言宮殿等に住して。自受法樂の故に演說し給ふ所』と是れ兩部大經なり。此の兩部大經の宗要を以て法の本源とし。敎の極位とす。何故に然かるやと云ふに。兩部は衆生の色心。即ち諸佛理智の体なりと說く。是れ差別の事に即して平等の理を示すなり。故に兩部の外に別に不二を立てず。兩部宛然として不二なり。不二を離れて兩部あるに非す。是れ即身成佛の深義を顯はし盡くせり。東密之を以て正傳とす。台密所傳の意は。兩部を以て而二とし。外に蘇悉地を立てゝ。之れを不二の極位とす。本宗の所傳とは。其趣を異にせり。

兩部大經の中。大日經に總じて三種あり。一には法爾常恒の

本。即ち諸佛の法曼荼羅是なり。二には分流の廣本。即ち龍猛菩薩南天の鐵塔に入て。親しく金剛薩埵に對して之を受け誦傳せる所の十萬頌の經是れなり。三には畧本。三千餘頌あり。是れ龍猛菩薩。十萬頌の中より宗要を摘りたるものなり。善無畏三藏此の本を譯して七卷とす。高祖感得の經本是れなり。

次に金剛頂經にも亦總じて四種あり。一には法爾常恒の本。二には塔內安置無量頌の本。三には流布の十萬頌の本。龍猛菩薩誦傳する所の廣本是れなり。四には四千頌の畧本是なり。現流の四卷の畧出經は。此四千頌の中より。初會の四大品を畧出したる者にして。敎王經の如きは。初會四大品の中より。金剛界品のみを譯出し。施護三藏の翻譯せる三十卷の敎

王經は。初會の四大品を悉く譯せり。是の如く両部に三本四本の異ありと雖。只是れ開合の不同なり。此中大日經に就て。一行禪師二十卷の疏を撰したることは。前に已に明せるが如し。金剛頂畧出經に就て。不空三藏。金剛智三藏の口授を得て筆記せるものを金剛頂義決と名く。此外百餘部の經軌あれども。皆両部二十万頌の中より分流別出するに過ぎず。

第三節　能說の教主＝本地身＝加持身

両部大經の說相は。衆生邊に約して說かば。衆生の自心を法界宮とし。本有の自性法身。常に之に住して。自ら阿字不生の妙理を演說するに外ならず。若し佛邊に約して教主を論せば。本地身とするか。加持身とするかは。古來異議紛紜として。十九人二十八說に分れたり。今要を取て自性本地身と自性

加持身との二義を畧述すべし。

一傳に曰く。教主は自性本地身なり。如何となれば。無畏三藏は教主薄伽梵の句を釋して本地身とし。高祖は之を自性身說法と註せり。故に両祖の意は。六大體大の位に於て。純。圓純方無相絶待の佛形を立て。之を自性本地身とし。以て能說の教主とす。若し両部を區別せば。大日經は唯理の法身を教主とし。金剛頂經は唯智の法身を教主とす。是れ八祖嫡傳にして。興教大師、及法性、道範の二哲。專ら首唱せる所なり。

一傳に曰く。大日經の教主は。四種法身の中には。是れ自性身なり。大師二教論の中に。教主の句を自性身と釋するが故に。若し本地加持を論ずれば。加持身なるべし。如何となれば三藏の疏に法爾本地の位は。言語盡竟心行亦寂と釋す。故に隨

緣加持の位に。一經說會の儀式を現ず。金剛頂經の教主も之に準知すべしと。此義は賴瑜法印の主張する所なり。

以上兩傳の差異。前義は體大の極位に種三尊擧一全收すと建てゝ。之を教主の體とす。後義は體大に於ては。唯堅濕煖動の性のみありて。種子三形を見ず。況んや尊形をや。故に自性身と云ふも。四曼相大に下れる佛形なりと談ず。要するに此兩傳は。體大本地の極位に於て。相好具足の佛身を建立すると否とに過ぎず。是れ新古教相の別るゝ所以なり。

第四節　大日釋迦二佛の同異

諸佛の身心は。大空無相にして。任運無分別なれども巧みに機に應ずること。譬へば一月の能く萬水に影を現ずるに似たり。或は遍法界にして至らざるなきを見。(法身)或は八萬四

千の相好具足の身を感じ。(報身)或は丈六老比丘の身を感じ。(應身)或は天龍夜叉鬼神雜類の身を感ず。(化身)此の如く能感の人。宿習の厚薄。智の淺深に隨て。法報應化の大小麁細を異にす。故に大日釋迦の二佛は。只機感の不同にして。其體二あるに非ず。故に高祖云く『法報應化は體同にして用異なり』と。元來釋迦大日の同異は。娑婆世界に八相應同して。衆生を化益すると。普く法界に遍して。常恒に自受法樂するとの別にして。所謂本地垂跡の不同のみ。而も實には本跡不思議加持無二の故に。本を以て末を攝すれば末は即ち本に歸し。末を以て本を攝すれば本は即ち末に歸す。故に垂跡の外に本地なく。本地の外に垂跡なき也。此に依て之れを尅論すれば現今流布の一切佛教は總て釋尊を以て教主とす。之に內證ぁ

り外相あり。是れ大日釋迦の分るゝ所以なり。故に高祖の二教論に。六度經を引證して曰く『第三の法寶とは。所謂過去無量の諸佛所說の正法と及び我が今の所說となり。所謂八万四千の諸の妙法蘊なり。攝して五分とす。一には素怛纜。二には毘奈耶。三には阿毘達磨。四には般若波羅蜜多。五には陀羅尼門なり。此五種の藏を以て有情を教化す』と。此五藏の中に前四藏を顯教とし。第五藏を以て密教とす。此密教の中に兩部大經を攝することは明白なり。故に釋尊顯教を說くには即ち報身應身を以てし。密教を說くには則ち內證法身を以てするや疑を容るべからず。

第五節　秘密大經と百億契經との說時

釋尊の內證已に大日如來なりとせば。如來一代四十九年間。

何れの時を以て。秘密大經を說き得たりとせんや。小野纂要に云く。『若し釋迦說教の次第に準せば。法華經の後眞言を說く。故に三十七尊出生義に云く。化城を起て以て之を接し。糞除に由て以て之を誘ふ。大種姓の人法已に熟し。時方に至るに及んで。遂に却て自受用身に住し。色究竟天宮に據て。不空王三昧に入り。普く諸の聖賢を集め。地位の漸階を創つて。等妙の頓旨を開く』と。此他法華と同時の說。或は涅槃經を說ける後なりとの說あり。此の如く種々の見解ありと雖。各々一類を引攝する一邊に約せる耳。蓋し大日釋迦は一佛の內證外用の不同に過ぎざれば四十九年中。內には常に自受法樂の故に密教を說き。外には諸機の爲に。時に應じ處に隨て。百億契經を說く。畢竟するに是れ顯密兩機感見の不同のみ。佛

に作意分別ありて。內には此に應し外には彼に應ずるには非ず。只是れ如來圓身圓音の妙境界。凡情を以て計度分別すべきにあらざるなり。

第六節　兩部大經の結集

兩部大經の結集は。如來滅後に。阿難、迦葉、文殊、彌勒等。七葉巖に於て。大小二藏を結集せるとは。其趣を異にして。之に三重の義あり。一には金剛薩埵の結集。則ち法身如來自證會に於て。親しく此法門を說き。金剛薩埵に敕して之を結集せしむ。金剛薩埵佛勅を受け。大衆の中に於て。如來の散說を結集し。信受奉行の摸範と爲す。二には大日如來の結集。則ち如來自ら已心內證の法門を宣說して。自眷屬と共に。自受法樂するを云ふ。三には法爾の結集。是れ法爾常恒の本也。此經十方三

世の有情界非情界に遍じて盡くることなし。之を法爾の結集といふ。以上三重の中。初二は隨緣の結集。第三は法爾の結集なり。而も實には隨緣も法爾を全ふし。法爾も隨緣を妨げず。且夫れ薩埵の結集の經は。必ずしも貝葉絹紙に記するにあらず。只一會の賢聖を證明として。如來の散說を校合聯綴し如是我聞等の五成就の語を安じ。展轉受誦するなり。世人の想像する。筆記編纂の如きとは全く異れり。是れ亦知らずんばあらべからず。

第四章　立教開宗

第一節　立教

其一　頭密二教の對辨

高祖入唐以前。三乘五乘十二部經を精研し。顯教に於ては其

極底を叩き。入唐以後。密教の蘊奥を極め。即身成佛の大智眼を開き。一切佛法海を決了開會し。横竪の判釋を爲せり。曰く辨顯密二教論の對辨。曰く十住心論、秘藏寶鑰の住心建立是なり。顯密對辨の意趣云何。謂く如來の心は。平等々々にして。圓音無礙に說法すれども。聞法の衆生機根千差にして、宿習に厚薄あり。內外性相の見解を異にし。顯密の淺深を生じ。隨て佛身を感見するにも。法報應の三種あり。所謂報身應身は。上十地滿位の菩薩より。下二乘凡夫の諸機の爲に。華嚴、法華、般若、寶積、最勝、涅槃等、及四阿含等の。一百落叉部の經を說き。六度四諦十二因緣等の宗要を示す。並にこれ隨他意にして。權方便門なり。所謂法身如來は。色相平等にして。法界に遍滿し。常恒に自眷屬と自受法樂の爲に。眞言陀羅尼門を說く。是

れ金剛頂瑜伽經及び大日經等。二十萬頌の經なり。則ちこれ隨自意にして眞實門なり。彼の四家大乘は。權方便の百億契經を所依として。立教開宗するが故に。縱令見解巧みに萬法唯識。八不中道。三諦圓融。十玄無礙等を談じて。各自に至極なりと主張するも。皆是れ因分可說の分齊にして。未だ以て權關の樊域を出づること能はず。本宗は彼等の所謂果分不可說の處に於て。唯佛與佛自受法樂の眞實門を開く。即ち是れ兩部大經なり。顯密因果權實の優劣。辨を待たずして知るべし矣。夫れ此の如く顯密を判じて。優劣淺深を辨ずるは。敢て彼我の見を逞ふして。是非を爭ふに非ず。只彼の四家各々其權門たるを知らずして。却て實と執するの迷情を破斥するのみ。若し此言に依りて權の權たる所以を知らば則ち實の

實たる所以を知り。權實融同して百年の生盲一時に開けて忽ちに天地日月を見ん。高祖云く『纔に斯文を見ば。雲霧忽に朗にして關鑰自ら開け。万劫の暗夜頓に日光を褰げむ』と。斯く論し來れば。百億契經悉く兩部大經に歸して。同一秘密同一醍醐味となる。嗟乎亦深遠ならずや。

其二　十住心の建立

我心本來無相絶待にして。萬法を總該し。其涯際を知るべからず。迷へば則ち六道に沈み。悟れば則ち四聖の域に遊ぶ。只一心の迷悟に依て。十界の差別を現ずるのみ。高祖之に由て大日經及菩提心論釋摩訶衍論の意を敷衍して十住心を建立す。此の十住心竪に觀ずれば乘々差別し。横に觀ずれば智々平等なり。

第一異生羝羊心　凡夫因果の理に暗く。善惡の何たるを知らず。但三毒を恣にして五慾に貪着し。地獄天堂あることを信ぜず。晝夜に十惡業を行じて。毫も慚愧の心なく。不忠不孝にして人倫五常を顧みず。或は斷見を起して因果を撥無し。或は常見を起して輪廻を信ぜず。此の如き等の諸の外道も亦是れ羝羊の心なり。種々の業を作りて種々の果を感じ。身相萬種にして生ず。故に異生と名く。愚痴無智なること彼の羝羊の如し。故にまた之に喩ふ。

第二愚童持齋心　凡夫少しく因果の理を信じ。三毒五欲の非を覺り。自ら勤儉節食し。之れを親疎に惠施し。漸く五戒十善を護り。須彌の四洲に生じて人間の尊貴を極むる住心なり。古來支那に行はるゝ孔孟老莊の敎は恰も此住心に當れ

り。

第三嬰童無畏心　是れ漸く人生の煩を厭ひ。天堂の樂を冀ふの住心なり。或は外道の教を奉じて。有漏の戒定を修し。三界の諸天に生れ。少分の厄縛を離る。故に無畏と稱すれども。未だ神我の繫縛を解脫すること能はず。故に嬰童の名あり。以上の三心は世間の住心なり。所謂印度の數論。勝論等の諸婆羅門及歐米の耶蘇教等の諸教。其人倫を全ふする邊は第二の住心にして。其神我を計し邪見を起す邊は第一の住心に當り。其生天を冀ふ邊は。第三の住心に攝む。

第四唯蘊無我心　是れ出世間の初歩にして。俱舍、成實、等の宗之に當る。其教たるや數論、勝論等の妄計を超えて。三藏廣く張り四締普く觀じ。諸戒を堅く持ち。人空三昧に住し。無漏

の眞智を得て。見惑、修惑を斷盡し。三界の牢獄を打破し。不生の聖果を得て。人天の導師と爲る。是れ即ち聲聞の分齊にして六宗二十派。計宗不同なれども。畢竟ずるに此の唯蘊無我心の範圍を出でず。

第五拔業因種心　是れ前の住心より一段を進めたり。即ち緣覺乘なり。これに麟角と。部行との判あり。此人智慧微細にして。生死の因果を分拆し。之を十二因緣として深く觀じ。無師の智慧。自然の尸羅他に受くる所なくして自ら悟り。生死の業根たる無明の種子を滅し。極滅無言三昧を證す。此境界は長爪、犢子の窺窺する所に非ず。況んや其他の外道をや。

以上四五の住心は。佛教中最下級の小乘教にして。生死を實有なりと認めて之を畏れ。涅槃を幻化なりと知らずして。之

に沈醉す。故に菩薩の如く未來際を期して。一切衆生を濟度し盡すの大悲願を起すこと能はず。是を以て如來之を彈呵して。大乘に廻心せしむ。

第六他緣大乘心　是れ法相宗なり。此心高く二乘所談の六識に越へて。廣く八識を談ず。謂はく第八の阿賴耶識を本として。之より一切萬法を生ず。故に三界は唯識の變造にして如幻虛假なりと觀じ。三大僧祇を經て。具さに六度萬行を修し。遂に轉識得智して。無上正覺の位に登る。こゝに後得の大悲、報化二身の影を現じ。廣く三乘教を說て。三根の衆生を度し五戒、十善を以て人天を導く。但し機根は五性各別にして。成佛するものあり、成佛せざるものありと談ず。此住心を他緣大乘と號するは。萬法唯識の觀念を以て。同體の大悲を起

し。普く法界の衆生を緣じて。平等に菩提涅槃の妙果を獲せしむるの義なり。

第七覺心不生心　是れ三論宗の分齊なり。此心前住心より歩を進めて。彼が有なりと執する第八識も緣生無性にして。不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不去、不來、なりと觀じ。生死、涅槃、煩惱、菩提、畢竟空なりと知る。畢竟空なるが故に。空宛然として有なり。有宛然として空なり。此觀に住すれば。一念に三大劫を經て自行を滿し。一乘に三乘を開說して衆生を敎化す。機根に五性の差別なく。等しく佛性を具へて。皆な悉く成佛す。是れ眞如緣起說より然らしむる所也。

第八一道無爲心　是れ天台宗に相當す。此宗の說く所は六根六塵相對すれば、心必ず生ず。纔に一念生ずれば。此に地獄、

餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛、の十法界を具す。此十法界に各々十法界を具して百法界となる。此百法界に各々五陰と、衆生と、國土との三十種の世間を具す。故に通計すれば。三千世間となる。此三千世間一念の中に在り矣。若し心なくんば止みなん。芥爾にも心あれば則ち三千世間を具す。此心と三千世間と相望むるに。心前きに在り。三千世間後ちに在りと言ふと勿れ。又三千世間前きに在り心後ちに在りと言ふこと勿れ。若し一心より三千世間を生ずと言はゞ。則ち是れ縱なり。若し心一時に三千世間を含ずと言はゞ。則ち是れ横なり。縱も亦た不可なり。横も亦た不可なり。心たゞ是れ三千世間。三千世間たゞ是れ心。故に縱にあらず横にあらず。一にあらず。異にあらず。玄妙深絶せり。識の識る所にあらず。言

の言ふ所にあらず。故に稱して不可思議境とす。之を妙法蓮華といふ。法華八軸に此の理を說て。爾前の三乘は一乘の爲に設くる權方便なりと開示し。十方佛土中唯一乘法のみ有て。二も無く亦三も無しと顯はす。此一乘又は一道といふ。是れ法爾無作の三諦なり。此理を證するを常寂光土の毘盧遮那佛といふ。此佛此當位に在りては。究竟と稱すれども。後の住心に望むれば。纔に入道の初門と爲る。

第九極無自性心　是れ華嚴宗に相當す。此住心は第八住心の圓融の空理に沈滯するとは。其趣を異にして。進んで止まざるの住心なり。其の說く所は。若は理若は事。擧體無性なりと了知し。無性の法界自在に緣起すと談ず。此法界に三種の別あり。所謂理法界、事法界、無障礙法界是なり。又無障礙法界

に事理無礙法界と事々無礙法界とあり。就中事々無礙法界は此宗獨特の所談なり。之が緣起の自在を示すに。十種の玄門を立つ。謂はく且く一念心生起に就て云はゞ。一念纔に起る時必ず十玄門あり。一に曰く此心同時に萬法を具して、前後あるとなし。之を同時具足相應門と云ふ。二に曰く心諸法に遍して心壞せず。諸法全く心に在て諸法移らず。廣狹自在にして無障無礙なり。之を廣狹自在無礙門と云ふ。三に曰く一心舒れば諸法に遍じ。諸法を攝すれば心内に容る。舒攝同時にして障礙あるとなし。之を一多相容不同門と云ふ。四に曰く此心已れを廢して多の諸法に同じ。多の諸法を廢して。此一心に同ず。一即一切。一切即一。圓融自在なり。之を諸法相即自在門と云ふ。五に曰く一心能く諸法を攝むる時は。一心

顯はれて多の諸法隱くる。諸法一心を攝むる時は一心隱れて多の諸法顯はる。顯々俱ならず。隱々並ばず。隱顯〻々隱〻は同時にあつて無礙なり。之を秘密隱顯俱成門と云ふ。六に曰く一心の中に無邊の刹あり。無邊の刹一心の中に現ず。炳然として同時に齊しく顯はれ。彼此亂れず。極めて是れ明了なり譬へば束箭の齊しく顯現するが如し。之を微細相容安立門と云ふ。七に曰く此一心の中に無邊の刹を現ず。無邊の刹の中に。又無邊の心あり。又無邊の心の中に。各々無邊の刹あり。此の如く重々無盡なり。譬へば帝釋の珠網の一の明珠の中に萬象共に現じ。餘の珠も亦皆然り。此珠透徹して。互に影を現ず。影また影を現じて。窮りなきが如し。之を因陀羅網境界門といふ。八に曰く此一心を見るに即ち無盡の法界を見る

此一心即ち是れ無盡の法界なるが故に。是れ心に托して法界を顯はす。之を托事顯法生解門と云ふ。九に曰く此心已に是れ一切處に遍じ。又是れ一切時に遍ず。彼の一切時に三世あり。三に各々三あり。之を九世とす之を攝めて一念心とし總世と名く。此の總別を合して十世とす。時に別體なく心に依て以て立つ。心已に無礙なれば。時も亦無礙なり。一念即無量劫無量劫即一念なり。過去に現末を置き。現末に過去を置く。各々本相を壞せずして。而かも障礙なし。之を十世攝法異成門と云ふ。十に曰く一心生ずる時萬法隨て生じて以て眷屬となる。所生の萬法も亦彼此相望するに。互に主伴と爲つて欽減あることなし。之を主伴圓明具德門と云ふ。是の如く一念心纔に起れば。必ず十玄門を具す。又六相具足して。圓融

の相を成す。曰く萬法總じて一念心を成す。一念心の中に萬法自から差別す。是れ總相、別相なり(一、二)曰く萬法同じく是れ一心の相なり。一心の相たる萬法は互に異れり。即ち是れ同相、異相なり(三、四)曰く萬法共に此一心を成す。而も萬法各各に己が位に住して一心の相を壞す。即ち是れ成相、異相なり(五、六)是の如く一心に六相を具足す。此十玄六相の法界觀を成就すれば。一行一切行、一斷一切斷、一證一切證にして。初後圓融し因果交徹す。故に初發心時便成正覺の頓益あり。華嚴經に八十、六十、四十、の異譯あれども。皆此法界緣起を。信解行證することを示すに過ぎず。此法界緣起深邃幽玄なりと雖。彼の宗之を因分可說の境界とし。果分は不可說のものと談ず。

第十秘密莊嚴心　此心前住心に果分不可說なりと談ずる境界に於て法身常恒に自眷屬と三密門を說て自受法樂す。是れ大日經、金剛頂經なり。此兩部大經は塵々法々六大、四曼三密にして擧一全收し圓融無礙することを談じ即身成佛の深義を示して衆生の色心即兩部曼荼羅なることを顯はす。故に此境界は前九の住心の窺ふ所に非ず。之を秘密莊嚴心と云ふ。是れ最極究竟の性德圓滿果海なり。

如上の十住心は吾人衆生の一心開展の差別にして。之を觀ずるに横竪の二あり。竪に論ずれば。背暗向明、捨劣得勝の次第にし乘々淺深あり。之を顯密合論の十住心と云ふ。彼の前九に寄齊して。六無畏の轉昇次第を明す之を心續生の十住心と云ふ。横に觀ずれば。十住心即是れ五種の三味道なり。初

二三の住心は。是れ世間の三味道。四五の住心は次での如く聲聞、緣覺の三味道。六七八九の住心は。是れ菩薩の三味道。第十は是れ佛地の三味道なり。若し一門普門の別を云はゞ。前四は是れ一門第五は是れ普門なり。是の如く一往差別すれども。其實義は人天鬼畜の法門も。毘盧遮那秘密。加持にして。之と相應すれば。一生成佛の頓益あるや疑なし。況んや第四以上の出世の三味道に於てをや。若又深く法體に就て觀ずれば。横即竪。々即横にして。十住心は皆是れ智々平等。同一本不生同一實際、十界輪圓の曼荼羅なり。

第二節　宗名

大凡そ宗名の安立は。或は所依の經に基き。或は所宗の論に由り。或は能立の人に據り。或は所願の淨土に就き。或は所詮

の法相に依りて之を定む。華嚴宗の華嚴經に於ける。三論宗の三論に於ける。天台宗の天台大師に於ける。淨土宗の淨土に於ける。法相宗の法相に於けるが如く。或は開祖自ら命名し。或は末徒之を首唱せるなり。然るに本宗は如上諸宗の立名とは。全く其撰を異にし。法身如來自ら世界海に宣言して。『眞言陀羅尼宗は。一切如來秘奥の敎。自覺聖智修證の法門なり』聖位經と云へり。斯く我宗名は。遠く法身如來の金口より出でて。其意深奥なる所以なり。

眞言とは何ぞや。梵には曼荼羅と云ふ。此一言に無量の義を含む。而も今略して說くに五種の差別あり。一には眞語。二には實語。三には如語。四には不誑語。五には不異語是なり。本宗の宗名たる。只此五種中の一語を以て譯するに似たれども。

其意五種を含じて洩らすことなし。抑言說文字は、直に是れ法性の體にして。法性の外に言說文字なく。言說文字の外に法性の體なし。故に維摩經に云く『言說文字は皆解脫の相なり。所以何となれば。解脫は內にあらず外にあらず。言說文字も亦內にあらず外にあらず。兩中間にあらず』と。これ高祖の所謂聲字即實相の深旨にして。釋論の所謂如義眞實語之に當れり。眞言の稱たる。本來三密中の語密に約すれども。其實を尅すれば。實相即眞言にして。三密互ひに涉入し。三大全收せり。是れ大日如來內證智の境界なり。此境直に是れ眞言陀羅尼宗なり。

第三節　宗憲

國に國憲あり。家に家憲あり。宗敎豈宗憲なかるべけんや。外

道は道究竟にあらず。生死を出でず。涅槃を得ず。而も尙ほ梵天等を覺寶とし。四吠陀論を法寶とし。傳授修行者を僧寶とし。十善を其戒とし。四禪を其定とし。六行觀を其惠とし。三學雙修し。他主空三昧を證す。之れを貶して外道と謂ふと雖。其宗憲に遵ひ其教則を守ることの嚴なるに至ては。今代の佛徒應に慚死すべきものあり吾徒豈に省みる所なくして可ならんや。高祖の遺誡に曰く。『出家修道は本と佛果を期す。輪王釋梵の家を要めず。豈況んや人間少々の果報をや心を發して遠く涉るとは足に非れば能はず佛道に趣くには戒に非れば寧んぞ到らん。必ず須く顯密の二戒を堅固に受持して清淨にして犯すことなかるべし云々』と。其言高く其意深し。忽ちに人をして白雲に跨り深淵に臨むの想ひを生ぜ

しむ。高祖去つて一千歲。其人無しと雖。其兒其孫奮て而して起たざるを得んや。三學双修は。佛家百代の命脉。何人と雖。これを取捨するを得ず焉。殊に我密宗の如き。敎愈〻高ければ。戒愈〻嚴なるべく。理彌〻深ければ定彌〻純なるべく。行果彌〻向上なれば智惠彌〻圓明ならざるべからず。豈無戒無定邪慧にして。即身成佛の宗風を宣揚し。高祖の遺法を維持するを得んや。高祖已に此金言を以て兒孫に示し。大悲尙ほ止み難く。三學錄を制定して以て闕下に奏し。朝廷之を嘉尙して以て永制と爲さしむ。其後を慮るの深く且厚きこと。豈感泣に堪ゆべけんや。三學錄は煩を思ふて省畧に從ひ。今左に其官符を示さん

大政官治部省

眞言宗五十人

右被右大臣宣偏奉勅件宗僧等自今以後令住東寺其宗學者一依大毘盧遮那、金剛頂等二百餘卷、經、蘇悉地、蘇婆呼、根本有部等一百七十三卷、律、金剛頂發菩提心論、釋摩訶衍等十一卷、論等若僧有闕者以受學一尊法有次第功業僧補之若無僧者令傳法阿闍梨臨時度補之道之秘教莫令他宗僧雜住者省宜承知依宣行立爲恒例符到奉行

參議從四位下守右大辨勳六等　伴宿彌國道

從七位守左少吏　美努連清庭

弘仁十四年十月十日

是れ即ち嵯峨天皇我高祖の奏上を嘉納し有司に命じて宣布施行せしめ給ひたるもの實に我宗不磨の大典として傳承し來り今日と雖嚴乎として一宗を制するの權能を有ず我宗將來其必要に依り幾たび學制を改め幾たび宗規を訂すとも此大典の精神を無視することを得ず又取捨に涉るを許すべからず是れ高祖の遺範なり吾宗の宗憲なり吾教の命脈なり兒孫たる者永く繼承欽奉せずして可ならんや

第四節　宗義

其一　即身成佛の義

本宗立教開宗の本意は他諸宗の三劫成佛を談ずるに異んじて即身成佛の深義を顯揚するに在り謂く我等一切衆生の身心は必ず衆緣具足して生ず緣より生ずるものは本來

不生なり。其體は六大を以て組成して無障無礙なり。其相は四曼を以て莊嚴して輪圓不離なり。其用は三密相應して加入攝持す。一身是の如くなれば一切身亦是の如く。一身一切身圓融無礙にして。帝釋の羅網の如く重々交映して無盡なり。此身即ち彼身。彼身即ち此身。佛身即ち衆生身。衆生身即ち佛身にして。同而不同、不同而同なり。衆生身即ち佛身なれば。衆生の身心即ち一切智々なり。この一切智々に自ら無盡々々の心王心所あり。即ち是れ兩部曼荼羅の諸尊也。此諸尊に各々五智無際智を具足し圓滿して缺減あることなし。是故に不二の智鏡を以て。十界の當相を照すに。煩惱の相なく。菩提の相なく。生死の相なく。涅槃の相なく。生佛の相なく。迷悟の相なく。同一實相同一本不生なり。之を即身成佛と云ふ。此

即身成佛。その義旨を論ずるに。本有、修生、內證、外用の不同あり。是れ理具。加持。顯得の三種の成佛ある所以なり。

理具の即身成佛　とは。異本即身義に云く『一切衆生の自心中に金剛界、胎藏界、の曼荼羅あり。因果を遠離して。法然として具足せるを理具と名く』と。故に此文を以て理具成佛の證とす。然れども。多くは誤解を免れざるものゝ如し。謂はく自心の中に本來兩部の曼荼羅あり。端嚴美麗にして相好具足せり。此佛は法爾自然に因果を遠離して。修力を假らざる佛なり。是れ理具の成佛なり云々と。果して是の如く解する者あらば。これ有所得の妄見なり。名は密教なりと雖。其の解は外道の妄計に墮するものも也。宗に立つる所の理具の實義。豈に是の如きものならんや。前にも略ぼ論ぜし如く。衆生の身

心は六大の因緣より生ず。因緣より生ずれば。その因これ六大その緣も亦これ六大。その因緣所生の法も亦これ六大にして。別に衆生の自性なく。衆生の擧體六大なり。その六大即ち毘盧遮那平等智身なり。之を理具の即身成佛と云ふ。

加持の即身成佛　とは。若し衆生あつて。親しく善知識に隨ひ。說の如く三摩地の法を受け。敎の如く修し悉地成就する時は。行者の身心即ち佛の身心となる。例へば心彌勒の三摩地に入り。手に彌勒の印を結び口に彌勒の眞言を誦ずれば。諸の賢聖及天龍夜叉。其行者を見るに彌勒の形貌となりて。威光赫々たり。其道場直ちにこれ都率の內院なり。即ち琳賢大德、如法上人の。三摩地現前せしが如き是也。此の如く其他諸尊の三摩地を修するに。現に其尊と見る。故に慈氏の儀軌

に云く『此法を若し奉持する者は。凡夫に在て未だ煩惱を斷ぜずと雖。法力を以ての故に。所作の處に隨ふて。彼の聖力に等しうして。諸の賢聖及諸天龍八部一切の鬼神を駈使するに。皆敢て違せず。法印の不思議なるを以てなり』と。之を加持の即身成佛と云ふ。

顯得の即身成佛　とは。眞言行者如實知自心の觀行成就する時。心中無量の功德を開敷し。竟に依正無礙十界平等の佛身を証す。之を顯得の即身成佛と云ふ。

抑、即身成佛は。本宗獨特の建立にして。餘敎の曾て談ぜざる所なり。故に龍猛菩薩云く。『唯眞言法の中にのみ。即身成佛するが故に。是れ三摩地の法を說く。諸敎の中に於て闕して書せず』と。道理敎證略ぼ上に述ぶるが如し。若し更に其人を指

さんか。現に釋尊の如きは。無量劫の中に。六度萬行を修し。最後身に至つて。六年苦行せしかども。成佛することを得ざりき。遂に諸佛に隨て。唵字の觀を受け。此觀を成じ終りて。後夜分に於て。速に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得たり。(守護圓經)と。是れ王宮誕生の身を改めずして。頓に成佛せられたるもの也。又我高祖の如きは。紫宸殿の論場に於て。大日の秘觀に住すれば。肉身に金色の光を放つて。五佛の寶冠を頂き。即身成佛の妙相を顯現せり。又興教大師は現に不動尊と成りて。火焔を放ち。廣澤の寛朝僧正は。肉身を轉ぜずして。虛空に登り淨土に遊ぶ。其他古德の芳躅に求めば。是の如きの類例枚擧に遑あらざるべし。今人只自ら修してその力の足らざるを慚づべし。法に對して疑ひを起すこと勿れ。

其二　體相用三大の義

熟一切法を通觀するに。皆體相用の三大を具せずと云ふことなし。これに顯密の不同あり。顯教には眞如を體とし。本覺恒沙の性德を相とし。報應二身の化用及び衆生善惡の作業を用とす。本宗は之に異なりて。地水火風空識の六種を以て體大とし。大三法羯の四曼を以て相大とし。身業、口業、意業の三密を以て用大とす。

六大の義　發智、婆娑、俱舍、の諸論には。地水火風空識の六大を以て有漏隨增の六界とし。本宗には此有漏の六界を以て直に法性の源極とす。何を以て然か云ふや。謂はく六界即ち本不生なるが故に。若し開て之を言はゞ。地大は是れ阿字なり。水大は是れ嚩字なり。火大は是れ囉字なり。風大は是れ訶

字なり。空大は是れ欠字なり。識大は是れ吽字なり。次での如く不生、離言、垢染、因業、虛空、了義の六德を表す。此六種は無礙無障にして。常に相應涉入せり。此體大の法位に自然に阿等の文字あり。方圓等の形色あり。黃白等の顯色あり。尙ほ相好具足の佛形あり。堅、濕、煖、動、無礙、了別の性德あり。興敎大師、覺海尊者、法性大德等同じく此義を立つ。然るに信日闍梨は。此六大の法位に。唯、三形のみありて。尊形なしと云ひ。賴瑜法印は唯、堅濕等の性のみありて。顯形文字なし。何に況んや相好の佛形あらんやと云ふ。以上三傳に依て。法性の源極を談ずる吾諸先德の意を窺ふを得。其談の淺深如何は暫らく學者の研覈に讓るべし。此六大能く迷悟染淨一切の法を生ず。上法身より下六道に至るまで。麁細大小重々無盡なりと雖。畢

竟ずるに六大變造の差別を出でず。故に六大を以て諸法の體とす。其緣起の玄理に至つては。下に之を明すが如し。

四曼相大　四曼とは一には大曼荼羅。即ち諸佛菩薩の相好具足の身及六道衆生の相貌是なり。又其形像を彩畫するも の亦大曼荼羅の名を得。二には三摩耶曼荼羅。即ち諸尊の印契及所持の標幟。刀劍、輪寶、金剛、蓮華及國土山川草木等是なり。若し其形像を彩畫する亦是なり。三には法曼荼羅。即ち諸尊の種子眞言。一切契經の文義。及世界各國に行はるゝ所の種々の文字等又是なり。四には羯磨曼荼羅。即ち諸尊の坐禪攝化等の威儀。及六道衆生の種々の作業又是なり。若し其像を彫刻し。揑鑄して威儀の顯はなるものを亦羯磨曼荼羅と名く。是の如く四種曼荼羅は。十界の有情及器界、文字、作業に

して。これ六大體性の上に顯はるゝ所の相貌差別なり。其數無量無邊にして淺知の及ぶ所にあらず。而も彼は此を離れず。此は彼を離れず。燈光の互に涉入して相離れざるが如し。當に知るべし。見聞覺知の一切の境界は。悉く四種曼荼羅にして。即ちこれ眞佛なることを。

三密用大　三密とは身語意の三業をいふ。諸尊の三業は。皆六大法性の作用なれば。等覺十地の菩薩も。尚ほ其境を窺ふを得ず。是故に密と云ふ。衆生の三業も。若し迷情より之を見れば生死の妄法なれども。若し其實相を論ずれば。佛の三密と同等にして別異あることなし。是の如く佛の三密衆生の三密。等しく無盡にして互ひに加入し。彼れと此れと攝持せり。故に知んぬ十界凡聖の三業は俱に六大法性の作用なることを。

其三　諸法の緣起

一　序意列名

諸法の緣起は甚深微妙にして。其眞相を得ること甚だ難し。故に古今東西の宗教家哲學者。皆其岐に惑ひ。其源を誤る者多し。請ふ試みに之を論ぜん。大段分つて五科と爲す。初に神我の變造を破し。二に六因四緣を明し。三に阿賴耶緣起を說き。四に眞如緣起を示し。五に六大緣起に終る。

二　神我の變造を破す

印度に釋尊以前より行はるゝ外道の中。數論宗の如きは二十五諦を建て。冥性諦を以て萬物の根源とし。此冥性諦の中に一切諸法を具す。神我なる者ありて。此諸法を受用せんと

欲せば。大我慢等の二十三諦。彼の冥性諦より轉變す。是れ宇宙萬物なり。神我之を受用して生死界に輪轉す。もし之を離るれば。生死を解脱して涅槃に至ると。又勝論の如きは六句義を建て。神我は其體三世に渉り。諸法に遍じて常恒不變なり。能く過去を憶念し。現在の諸境を覺知し。或は學習し。或は恩讐に酬ゆる等。一切の作用を具す。此神我なる者法非法の惡業を作り。之に依て五道を變造し。此中に輪廻して苦樂を受くと。又一類の外道あり執して謂はく。一切有情は父母の和合より生じ。其父母も亦其父母より生ず。此の如く展轉して無量世に至る。人類は人類より生じ。畜類は畜類より生ず。國土山川草木の類は。地水火風の極微聚りて生ずと。又支那に古代より行はるゝ道教の如きは。執して曰く天地萬物は

皆虛無の大道より生ず。所謂、道自然に元氣を生じ。元氣天地を生じ。天地萬物を生じて而かもその然る所以を知らずと。又婆羅門の徒は執すらく。大梵天あり。一切知見者なり。永劫不滅にして威德尊嚴なり。此尊能く諸の有情及國土を造る。上梵天より下地獄に至るまで。皆彼の尊の管領する所なりと。此他無數の外道ありと雖。之を類例するに概ね上に列ぬる所の內我外我を出でず。

破して曰く凡そ天地間の森羅萬象は。其の數際限なしと雖。一として獨り自から生ずる者なく。必ず衆多の因緣に由りて生ず。是れ法爾の眞理にして。萬世不易の定則なり。故に如何なる甚深幽玄の名を附するも。此原則に牴觸せるものは。決して眞正の道と爲すに足らざる也。然るに彼の勝論數論

の如きは。神我、冥性、を計して。以て諸法變造の原因とするが故に。果して獨生の一因ありて。萬物之より生ずるの義と爲る。其妄見たるや論なき也。若し一法も無んば止みなん。芥爾にも一物ありとせば。これ決して獨り自から生ずるとなく。必ず衆多の因緣を具足す。緣より生ずる者は衆緣のみありて。其實體を窮むるに畢竟不可得なり。故に知るべし彼宗の執する神我と冥性諦とは。たゞ是れ迷情の計度のみなるを。又父母和合生の說。忽ちに聞けば。稍、耳を傾くるに足るが如しと雖。是れ只萬物の皮相に就て妄計を起すのみ。未だ其理を盡さず。彼徒は只父母の疎緣のみを知りて。其尤も必とすべき親因を知らず。謬見たるを免れざる所以なり。夫れ有情の生ずるや必ず過去世の業力を親因とし。現在の父母を疎

緣として生ず。外の國土山川の如きも。只四大の極微聚つて生ずるに似たれども。實は有情の業力を親因として。四大の極微を感じ。之を疎緣として聚集して現はるゝのみ。況んや人は人より生じ。畜は畜より生ずと云ふが如きは。淺薄なる常見にして。敢て論ずるに足らざるなり。當さに知るべし彼徒の所執も是れ迷情の計度のみなるを。次に虛無の大道を以て天地萬物の根源とするは。是れ亦眞理に非ず。元來虛無とは何物を指して云ふや。若し眞の大道ならば。寂照靈通にして虛無なるべからず。蓋し彼等は。所謂成、住、壞、空の中の空劫の相を誤認して以て此說を立てたる者ならんか。果して然りとせば空劫は世界既に破壞し畢りて。一微塵も有るなきを云ふなり。豈に以て道源と爲すべけんや。現に世間法を見

るに。未だ嘗て斷無より萬有を生ずることなし。又虛無とは空劫を云ふに非ず。自然に生じて其然る所以を知らざるの謂なりと云はゞ。是れ亦理に契はず。一塵一法と雖。生起するには必ず衆多の因緣あり。決して自然に偶爾として來る者にあらず。當に知るべし虛無の大道も亦是れ迷情の計度のみなるを。

次に梵天萬物を造作すと謂ふが如き。其淺見洵に笑ふべきに似たりと雖。古來印度に盛んなる波羅門の徒。之を迷信して離るゝこと能はず。今之を難詰して以て彼徒の迷夢を醒まさん。難じて曰く若し梵天一切萬物を造ると云はゞ。彼の梵天は誰に造らるゝや。若し梵天獨り生じて他に造らるゝに非ずと云はゞ。則ち理に非ず。萬物の獨り自から生ぜざる

ことは既にこれ定まれる理なるが故に。若し梵天の外に更に作者ありと云はゞ。梵天豈に威德獨尊なるものならんや。若し又果して梵天我等を造るの能力を具せば。何ぞ悉く善人賢人を造らずして。社會に幾多の惡人愚人を出すや。若し善惡賢愚は衆生の自ら爲す所。梵天如何ともすべからずと云はゞ。梵天は全智全能にはあらざるべし。衆生の作業を如何ともする能はざるが故に。若し善惡賢愚は衆生自ら爲す。故に自ら其責に任ずべし。天に於て何ぞ關せんと云はゞ。博愛救世の義何くにあるや。此の如きの難問。愈々辨解せば愈々多きを致さん。當さに知るべし。彼等の所執も亦是れ迷情の計度なることを。彼歐米諸州に行はるゝ所の耶蘇教の如きも。果して「ゴッド」を以て。全智全能の神とし。天地を創造し。

人畜を製作すと固執せば。吾人は又斷じて。これ迷信なり妄情計度なりと叫ばんのみ。然りと雖。基督教の教義。果して梵天外道と同一なりや否は。予の未だ知らざる所なり。

以上既に諸種の外道を破して。彼等の所宗。諸法縁起の眞理に契はざる所以を明にし終れり。是より當さに吾佛教諸宗の説を列舉し。轉深轉妙の義を明にすべし。

三　六因四縁の説

六因四縁は佛教の初門たる小乘の所立にして。彼外道の未だ推究し及ばざるの眞理なり。其説に曰く諸法大に分つて有爲無爲の二とす。無爲法は造作を籍らずして生滅を絶せり。故に無爲無因果と説く。其有爲法は獨り自ら生ずるものにあらずして。必ず六因四縁に藉て生ず。六因とは曰く能作

因。曰く俱有因。曰く同類因。曰く相應因。曰く遍行因。曰く異熟因是なり。四縁とは曰く因縁。曰く所縁縁。曰く等無間縁。曰く増上縁是なり。以下順次に其大略を示さん。

第一能作因　能作因とは。能生因の自體に就て名を立つ。故に能作即因なり。此因は諸法の生ずる時。強て力を與ふるに限らず。只障礙せずして。自由を與ふるを因とす。故に生ずる物の自體を除て。餘の有爲無爲及び三世の一切法は。通じて皆能作因となる。

第二相應因　相應因とは心法の起る時。心王心所互に協力して起るを云ふ。例へば眼根色境に對して。眼識の心心所生ずる時。其心心所。同じく眼根を所依とし(一)同一時に生滅し。(二)同じく青黄等の行相を爲し(三)同じく一境を縁じ(四)心心

所同じく一體にして多體あることなし(五)之を五義相應と云ふ。此五義相應に依て。眼識一聚の心心所生ずるなり。其他一切の心心所の生ずるも。亦必ず五義相應す。故に相應因と云ふ。是れ因の自體に就て名を立つ。相應即因なり。此相應因。その體を云へば。色心の中には。心法に限れども。然も時を云へば現在のみならず過末にも通ず。

第三俱有因　俱有とは一切の有爲法は獨り存立するものにあらずして。多法相依り相待つて存立す。これ亦因の自體に名くれば。俱有即因なり。例へば色法に就て云へば。地水火風の四大。互に因となり互に果となりて存立す。謂はく水火風三大の力にて地大を持てば三大は因にして地大は果なり。地大の力を以て。水火風の三大を持てば。地大は因にして

水火風は果なり。是の如く互に因となり互に果となる。譬へば三本の杖を束ねて地上に立つれば。三杖互に力となつて相存立するが如し。又俱有因は彼此の作用互に相維持する邊に名くるもの故。作用に籍らざる無爲法には通ぜず。

第四同類因　同類とは善惡無記の法。後の法を生ずる時。善は善。惡は惡。無記は無記。各々其類に隨て生ずるを云ふ。此因果相望むるに前後の性質同じき類ひなるが故に同類因といふ。是れ亦因の自體に名づく。故に同類即因なり。此因後の法を生ずるに二種の別あり。一には前の因と後の果と同等の勢力に起るもの是なり。二には前の因より後の果勝れて起るもの是なり。但し勝因劣果を生ずる理なし。此因は因果相望なるが故に。過去現在の一切色心に限りて未來に通ぜ

ず。

第五遍行因　遍行とは四諦の理に迷ふて起る見惑の中。苦諦に迷ふ身見。邊見。見取見。戒禁取見。邪見。疑。無明の七使。集諦に迷ふ見取見。邪見。疑。無明の四使合せて十一使の惑あり。此惑親しく苦集を緣す。其勢力強うして。見惑。及修惑に遍通して生ず。故に遍行因と云ふ。是れ亦因の自體に名を得れば遍行即因なり。此因の體は唯不善及有覆無記性に限れども。時を論ずれば三世に通ず。

第六異熟因　異熟因とは善惡の業なり。此業因、苦樂の異熟報を生ずるが故に。異熟因と云ふ。故に異熟が因にして依主に名を得。異熟とは。能生の因は善惡なれども。所生の果は無覆無記なり。因果の性質。異類にして熟するが故に異熟と云

ふ。果報を指して無記と云ふ所以は。三惡趣の果報にまれ。人天の果報にまれ。其果報と云ふは。只一生の間相續する身體を指す。故に其體煩惱にあらざれば無覆なり。他を損害するものにあらざれば無記なり。故に果報を無覆無記といふ。

以上の六因は。有部宗の羅漢迦多衍尼子の所立なり。其さには婆娑論。俱舍論に之を明せり。成實論には習因。(同類因)依因(俱有因)生因。(異熟因)の三を立てゝ其他を談ぜず。次に四緣の名相を釋せん。

第一因緣　因緣とは因即緣にして。六因の中。能作因を除て餘の五因を云ふ。但し五因俱稱するもあり。又一因二因なるもあれども。皆因緣と云ふべきなり。其體三世。及一切法に通ず。

第二等無間緣　等無間緣とは前後の心心所其體等しく前の心心所滅すれば後の心心所生ず其中に於て餘法の間隔なく相續して起るが故に等無間緣と云ふ其體過去の心心所に限る舊譯には次第緣と云ふ二體の心心所法同時に並起すること能はず故に前の心心所滅せざれば後の心心所起ることを得ず次第に前の心心所の滅するに因て後の心心所の起る緣となる故に次第緣といふ

第三所緣緣　所緣緣とは心心所の法は元來無形のものなれば必ず境に托し緣に依て起る故に其所托所緣の體を云へば廣く有爲無爲一切法に通ず

第四增上緣　增上緣とは即ち能作因なり故に其體廣し一切法を生起するとき或は力を與へ或は力を與へざるも之

を妨げずして自由を得せしむるを云ふ

以上六因四緣の名相を釋し終れり今略して此六因四緣の諸法を生起する義を云はゞ能作因は增上果を生じ俱有因相應因は俱生の士用果を生ず此二共に同時俱生の法にして其の法の爲に互に因と爲り互に果となる中に於て俱有因は色心に通じ相應因は心法に限る同類因遍行因は等流果を生じ同類因の中九地の無漏道は離繫果を生じ異熟因は異熟果を生ず四緣は六因と開合の不同なれば大畧六因に同じ但し心法の生起は必ず四緣を具足すれども色法は只因緣增上緣の二緣に依て生ず

此の如く衆多の因緣和合して以て次第に生ず彼の外道諸宗の如く一因より生ずるの理なし若し一因より生ずとす

れば必ず我體を計するに墮す。若し是の如きの我見を執すれば縱令十善を戒とし四禪定を修し。六行觀に依て。厭下欣上し。下初禪より乃至非想定に至て涅槃を證すと雖。其涅槃の實体たる畢竟じて神我獨存を妄計するに過ぎず。故に設令ひ三有を盡すに垂んとすれども。煩惱尙ほ存し。宿殃未だ殄びず。惡念旋起して苦海に沈淪すること。譬へば箭を虛空に射るに力盡きて還て落るが如し。然るに今此の小乘に至れば。因緣の有を觀ずるが故に斷邊に墮せず。自性空を觀ずるが故に常見に墮せず。此の如く有無の見を破し。斷常の二邊を離るゝが故に無我の眞智を生じ。三界の牢獄を出づ。前の外道諸宗とは。亦同日の論にあらざるなり。

四　阿賴耶緣起

阿賴耶緣起は。大乘の宗義にして。前の小乘所談の緣起よりは。其義遙に進みたるもの也。其說に曰く。一切諸法廣しと雖。百法を出でず。百法とは曰く八識心王。曰く五十一の心所。曰く十一の色法。曰く二十四の不相應法。曰く六無爲是なり。之を總じて百法といふ。是れ諸法の性相假實を辨別せるものにして。畢竟吾人の心識を離れざるなり。此百法の中に。後の六無爲は。不生不滅の理なれば。只諸法の所依となるのみ。緣起するの法にあらず。前の九十四法は有爲の事法なれば。皆因緣に依て生起す。中に於て假法を除て。餘の實法は。皆種子より生ずる所なり。種子とは第八識に藏むる所の生果の功能也。之に二類あり。一には本有の種子。謂はく無始より第八識に諸法を生ずべき親しき各々の功能あり。之を本有の種

子とす。二には新薰の種子。謂く前七轉識。(眼耳鼻舌身意末耶七)の見聞覺知するに隨て薰染する所の習氣。悉くこの阿賴耶の中に落在して。後の果を生ずべき力を有す。之を新薰の種子とす。之に二種の別あり。一には名言種子。二には業種子是也。其の名言種子とは。善惡無記三性に總通せる種子を云ふ。業種子とは。第六識と相應せる善惡の思種に。後ちの異熟果を生ぜしむる特別の能力あり。之を名けて業種とす。就中名言種子は。本有新薰の二種和合して善惡無記各々の自果を生ず。謂はく色の種子は色を生じ。心の種子は心を生じ。心所の種子は心所を生じ。善の種子は善を生じ。惡の種子は惡を生じ。無記の種子は無記を生ず。此の如く名言種子は。依報正報に通じて種類無量に差別すれども。各々自法自性を生じて。他法

他性を生ぜず。此の同類所生の果を等流果と云ふ。次に業種子は。彼の名言種子を助けて。異熟の依報正報を生ず。此業種子所生の果を異熟果と云ふ。以上は有漏の諸法の種子より其三界六道の果を緣起するの相なり。次に又第八に藏むる無漏の種子に聲聞緣覺菩薩の差別あり。此種子能く出世無漏の聖果を生ず。是の如く第八識所含の有漏無漏の種子より十界迷悟の諸法を生起するの義相。之を阿賴耶緣起といふ。前の小乘所談の六因は。此緣起に望むれば。皆增上緣の範圍を出でず。彼小乘はたゞ六識のみを知つて未だ第八識の何物たるを知らず。況んや此識所含の親因の種子を立つることをや。故に六因悉く疎緣に轉じて能生の義を失す。大小乘緣起の所談其等しからざること大概此の如し。

五　眞如緣起

眞如緣起は性宗の所談にして。前宗の阿賴耶緣起より。更に其の解を進めたる者なり。其說に曰く單眞立せず。獨妄成ぜず。必ず眞妄和合して諸法を生起すと。則ち前宗阿賴耶唯妄の片緣起とは。大に其趣を異にせり。彼宗の說たる。たゞ生滅の事の中に就て之を建立し。未だ眞理と和合の緣起を談ぜず。眞如は凝然として諸法と作らずと執す。然るに性宗は此迷夢を打破して曰く。事理互に和融して迷悟十界の諸法を生ず。根本無明、眞如を薰染するが故に。眞如と無明と和合して業識を成す。此業識無明を薰ずるが故に。不覺の念起りて妄境界を現ず。妄境界却て業識を薰じ。遂に麁に轉じ。智相(分別)相續、執取、計名等の煩惱を起し。種々の業を作りて。生死の苦

果を受く。之を向下轉變と云ふ。又眞如、無明を薰淨す。其薰力を以て妄心能く生死の苦を厭ひ。涅槃の樂を求む。此妄心に厭求の因緣あるが故に。却て眞如を薰淨し。諸法平等性を覺り。現前の境界は心の妄動に由ることを知て。之を離るゝの方便を起し。法性に順ずるの行を修す。長時の薰力の故に。無明即ち滅す。無明滅するが故に。心境隨て滅す。心境滅するが故に。妄想即ち滅して影を留めず。之を涅槃と名づく。是れ向上轉變なり。此の如く眞如法性。染、淨の緣に依て。迷、悟十界の相を生ず。之を眞如緣起と名づく。天台の一念三千、華嚴の六相、十玄等其談更に幽玄なるものありと雖。其體を尅すれば。眞如隨緣の義を出でず。故に今は眞如緣起に攝して。別に義を立てず。

六　六大緣起

六大緣起は沖深廣博にして萬法緣起の源極を窮む彼の小乘の六因四緣相宗の阿賴耶緣起三論の眞如緣起天台の性具華嚴の性起悉く之を該收し悉く之を融會し以て六大緣起の體と爲す彼等諸宗に於ても巧に緣起を談ずと雖畢竟因分可說の籠樊に繫りて未だ果分可說の大空に登らず其果界可說の六大緣起の深旨の談に至りては獨り我宗の放いまゝにする所也蓋し六大緣起の狀を觀ずるに衆生の六大他力を假らず自ら作用を起して諸法を生ずるにもあらず如來の六大獨り之に作用を與へて諸法を生ぜしむるにもあらず此の如く生佛の自他己に不生なり何に況んや此二体和合して更に生ずるの理あらんや又因緣なくして自

然に生ずるにもあらず故に知るべし六大の諸法を生起するは必ず衆多の因緣相待つて生ずるを此の因緣に染淨の別あり若煩惱業の染緣に依ては逆に生起して六道の迷界と爲り發心修行の淨緣に依ては順に生起して四聖の悟境と爲る故に高祖云く『是の如きの六大能く一切の佛及一切衆生器世界等の四種法身三種世間を造す』と是の如く迷悟の十界は必ず親因緣等の衆多の法に依て生ず斯の如く因緣に依て生ずるものなれば其所生の法一々能生の因緣に屬して別に固定の自性あるとなし又其能生の因緣を推究するに是れ又過去の因の六大と緣の六大とより生ず是の如く三四五六乃至無量百千万億劫の過去に遡りて推究するに亦復過去の因の六大と緣の六大とより生じて遂に其

本初を得べからず。故に知んぬ因縁生の當體は即空なり即假也。また即中なることを。此の圓融の理を阿字の三諦とし。之を本初不生と曰ふ。過去を云ふが如く。現在、未來の一切諸法も悉く因縁所生にして。本初不生なること亦然かなり。故に高祖の吽字義に無畏三藏の疏を引て云く『一切の法は衆縁より生せざることなし。縁より生ずる者は。悉く皆始あり本あり。今此能生の縁を觀ずるに。また〳〵衆因縁より生ず。展轉して縁に從ふ。誰をか其本とせん。是の如く觀察するときは。本不生際を知る。若し本不生際を知る者は。即ち是れ實の如く自心を知る』と。是れ吾宗所立の六大縁起の梗概なり。

其四　兩部曼荼羅の建立

一　總說

天臺止觀に云く『根塵相對して一念心起るに三千を具す。一念心を云ふが如く。當さに知るべし一微塵の色法も亦然るを』と。華嚴經に云く『微塵の中に無盡の法界を含し。其法界の中の微塵に又各々無盡の法界を含す。微塵を云ふが如く。當さに知るべし一念心も亦然るを』と。此の如き所說甚深に似たれども未だ其所含の實体を示さず。吾が秘密宗は彼の両一乘に超過して。一念心一微塵所含の無盡法界は。是れ金剛界會の曼荼羅胎藏界會の曼荼羅なりと示す。故に十住心論に云く『秘密莊嚴心とは。即ちこれ究竟じて實の如く自心の源底を覺知し。實の如く自心の數量を證悟す。所謂胎藏界の曼荼羅。金剛界の曼荼羅是なり』と。故に知んぬ。兩部曼荼羅は吾人衆生の色心にして。其体無數無邊なるを。此玄理を知ら

しめんが爲に。圖畫を假りて十界輪圓の差相を畧示す。是れ兩部曼荼羅なり。請來錄に云く『密藏深玄にして翰墨に載せ難し。更に圖畫を假て悟らざるものに開示す』と。是れ其意也。」

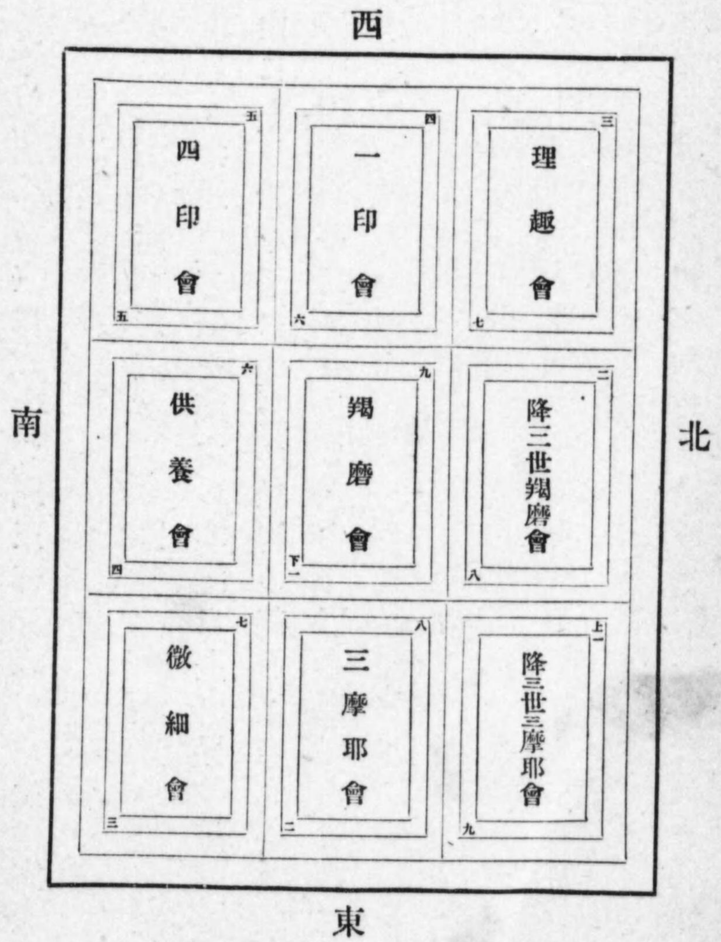
両部の中に。金剛界は五部を以て尊位を定め。胎藏界は三部を立てゝ佛位を示す。金剛界は障りを除き佛と成るの儀式なり。是故に九識を轉じて五智と爲す。是れ五部の別を建立する所以也。所謂第九識を轉じて。法界體性智と爲し。之を佛部と云ひ。第八識を轉じて。大圓鏡智と爲し。之を金剛部と云ひ。第七識を轉じて。平等性智と爲し。之を寶部と云ひ。第六識を轉じて。妙觀察智と爲し。之を蓮華部と云ひ。前五識を轉じて。成所作智と爲し。之を羯磨部と云ふ。胎藏界は化に出でゝ物を利するの行相なり。故に大定、大智、大悲の三德を開て。次

での如く佛、金、蓮の三部と立つ。此三部を以て衆生を攝取す。

二　金剛界

金剛界は九會の諸尊無盡なりと雖。衆生の心月輪の萬德を展開し。智々無邊の差別を顯すのみ。故に金剛界の諸尊は。蓮華を內にし。月輪を外にす。是れ唯智の義を標示するなり。その智體堅固不改の故に。金剛と稱す。今圖を以て九會の尊位を示さん。

金剛界九會曼荼羅圖



九會に就て從因至果と。從果向因との両趣あり。先づ從因至果の趣を明さば。第一に降三世明王。自ら三摩耶形を現じ。貪瞋痴を降伏して。成道の障礙を除く。是れ降三世三摩耶會なり。第二に三摩耶形變じて羯磨身となり。大忿怒の相を現じ。左の足に自在天を蹈み。煩惱障を斷じ。右の足に烏摩妃を蹈んで。所知障を斷ず。是れ降三世羯摩會なり。第三に前の二會に二障三毒を斷じ。此會に至つて。般若大空の智を顯現す。是れ理趣會なり。此般若の理趣を得れば。欲、觸、愛、慢、等の內外心境の十七位は。悉く本初不生の體と見はれ。般若波羅蜜多となる。第四に五相成身觀の時。行者の自身即ち本尊大日の體となり。一切の諸尊皆此尊の中に攝入して一體となる。是れ一印會なり。第五に四佛加持の時。四佛現じて。大日尊を圍繞

す。是れ四印會なり。第六八供四攝の菩薩。五佛等の諸尊に寶冠華鬘等を献ずるは。是れ諸佛供養の儀式なり。即ち供養會とす。第七に現智身等に至つて。微細金剛に遍入する禪定の相を說く。是れ微細會なり。第八に道場觀に至つて。種字轉じて三摩耶形となる。是れ三摩耶會なり。第九に三摩耶身を轉じて。相好具足の羯磨身を現ず。是れ羯磨會なり。斯く九會の從因至果の相は。眞言行者惑障を斷じ心地を開發するの次第なり。秘すべし貴ぶべし。

次に從果向因の義を辨ぜば。中央會を第一とし羯摩會と名く。是れ大曼荼羅なり。次に中央の下は。三摩耶會と名づく。是れ三摩耶曼荼羅なり。右の隅を微細會と名づく。是れ法曼荼羅なり。微細會の次ぎ上を。供養會と名づく。是れ羯磨曼荼羅

なり。以上の四會は次での如く。大三法羯の順序にして。是れ四曼を分離して配置するなり。供養會の上の隅を四印會と名づく。是れ四曼不離を表はさんが爲に。此一會に大智印。三昧耶智印。法智印。羯磨智印の四曼を一處に安ずるなり。中央の上を一印會と名づく。前の四印會は。四曼を一處に安ずと雖。尙ほ是れ別體なり。今この一印會は。四曼の諸尊皆不二の一智に歸して。諸尊悉く六大一實に住する義を顯す。故に上の六會は。麁より細に至り。異を會して同に歸す。會々の建立不同なりと雖。皆大日尊を以て體とす。即ち是れ自性輪身なり。次に第七會を理趣會と名づく。金剛薩埵の曼荼羅なり。此菩薩は是れ大日尊の垂跡にして。正法を以て衆生を化するが故に。正法輪身なり。第八第九の降三世の兩會は。大自在天

等極めて強剛にして化し難きが故に。金剛薩埵大忿怒の相を現じて。之を降伏す。是れ教令輪身なり。斯く九會の從果向因の義は。大日如來本地より跡を垂れて。衆生を利濟する三輪の次第なり。以上金剛界の曼荼羅を略說し終んぬ。

三　胎藏界

胎藏界會は十三大院に涉り。四重圓壇に無量の諸尊在すと雖。皆是れ我等衆生の心蓮の具德を開き。理々無數の差相を示すに外ならず。是故に胎藏界會の諸尊は。月輪を內にし蓮花を外にす。是れ唯理の趣を標するなり。胎藏の名は。世間の孩兒母胎に在りて。生育せらるゝが如く。衆生も阿字不生の理胎に在りて佛種を生長養育せらるゝに名けたるなり。今圖を以て胎藏界會の十三大院を示すべし。

胎藏界會十三大院圖

胎藏界曼荼羅は經疏に涉つて十種の相傳ありと雖今は現圖曼荼羅に就て之を示す十三大院と稱すと雖其實四大護院は四門の相向守護の天に攝して別に之を開かざるが故に十二院なり此十二院の位置は前後は四重なり左右は三重なり今胎藏界の諸尊を三部に分けて之を攝すれば八葉中臺は佛部觀音院は蓮花部金剛手院は金剛部なり此三部を本として四方の諸院は皆其の方處に隨て之を攝す曰く遍知釋迦文殊持明虛空藏蘇悉地の六院を佛部に攝し地藏院を蓮花部に攝し除蓋障院を金剛部に攝す周圍の外金剛部院は三部守護の善神とす此の如く觀察すれば胎藏の曼荼羅は佛金蓮の三部を出でず此三部は我等心中の麁妄執、細妄執、極細妄執の實相を顯はしたる大定、智、悲、の三德なり。

學者冀くは心外に向つて曼荼羅を求むるの愚を演ずるを止めよ。

以上兩界の現圖曼荼羅は八祖相承なり高祖曰く『秘密曼荼羅は閻浮提に傳はり金剛薩埵より龍樹菩薩に傳授し師々相傳して今に至るまで絶えず』と是れ實に難得難遇の秘密法門なり其深義に至りては面授に非ざれば示し難し求法の客幸に容易の觀を爲すこと勿れ。

其五　四種法身

如來の身は幽玄微妙にして青黃赤白に非ず長短方圓に非ず男女非男女に非ず欲色界と同性に非ず無色界と同性に非ず龍夜叉等と同性に非ず畢竟無相にして言議を離れ心慮を絶す然れども長へに同體の大悲止むことなく自在神

力加持に住して。普く十方一切世界の群機に應じ。無盡の色身を現じ給ふこと。譬へば一輪の圓月。無量の影を萬水に現ずるが如く。一相の摩尼青黃等の諸色に對するに隨て。其色に同ずるが如く。如來も亦復是の如く。種々の趣に隨て。種々の身を現ず。この身大別して四種とす。曰く自性法身。曰く他受用法身。曰く變化法身。曰く等流法身是れなり。

自性法身とは或る觀解甚深の機類ありて。如來の身相無邊にして。虛空の如く。一切所に遍じ。一切時に於て。常に自眷屬と。三密の法門を說いて自受法樂すと見る。是れ自性會の儀式なり。此の自性身に智法身と理法身との別あり。是れ兩部大經の敎主なり。

他受用法身とは或一類の衆生あり。尊特高大無量莊嚴の

身を現じて。一切有情界に於て。眞言道句の法を宣說すと感ず。是れ他受用法身なり。凡そ受用身に自受用と他受用との別あれども。自受用は智法身と同じきなり。故に今は只他の菩薩に。法樂を受用せしむる佛身を取て立つるなり。西方淨土の阿彌陀佛の如きも此類なり。

變化法身とは或一類の衆生ありて。丈六三十二相等の身を現じて。塵道世界(娑婆等)に於て。種々の密敎を說くと感ず是れ變化法身なり。釋迦牟尼佛の如きも是の類なり。

等流法身とは或一類の衆生ありて。普賢、文殊、觀音、彌勒、等の身を現じ。遍ねく十方世界に於て。眞言道句を演說すと感じ。或は。聲聞、緣覺、或は梵天、帝釋、毗沙門、乃至摩睺羅伽等の身を現じ。種々の性欲に應じ。彼の言音に同じて。眞言道句の法

を宣說すと感ず。是れ等流法身なり。又我が國を鎭護し給ふ諸の天神地祇も。此の一類なり。

如是四種法身は。能感の機の心淨きに由るが故に生ずる耶。所應の佛の加被力に由るが故に生ずる耶。若し機の心淨きに由るといはゞ。即ち是れ自性より生ずと云ふもの。若し佛の力に由るといはゞ。即ち是れ他性より生ずと云ふものにて。彼の勝論、婆羅門等の外道の內我外我より生ずと云ふに異ならず。自他の生無なるが故に。和合生も亦無なり。又復因緣無くして現はるゝに非ず。內因外緣一も闕くる所あれば。即ち顯はれざるが故に。當に知るべし四身皆悉く因緣の所生なることを。若し因緣より生ぜば。自性空にして顯はるゝ時も別に來る所なく。隱るゝ時も別に去る所なし。畢竟ずるに無相の相は。相常に無相にして。甚深微妙不可思義なり識者請ふ深く体得する所あらんを。

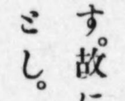
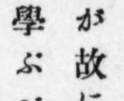
其六　神祇の實相

我國天地開闢の初より。天神七代地神五代の諸神を始さして八百萬神。或は伊勢に。或は出雲に。或は八幡に。或は賀茂に。或は春日に。或は熱田に。其他各地方。特別の因緣ありて之を祭祀す。其中に實類の神あり。權類の神ありと雖。皆是れ國家を鎭護し。億兆を安堵せしむるの善神にして。威嚴赫耀たる者なり。高祖兩部神道を開示する。其意甚深なりと謂ふべし。今略して其意を述べ神祇の實相を示さん。是れに橫竪の二義あり。若し橫に觀ずれば。神祇に權あり實ありと雖。其實相は皆是れ因緣所生法にして權實共に本不生なり。故に知る

べし神祇の當相各々毘盧遮那法身なることを。若し堅に觀ずれば。或は大日如來直爾に隨類の形跡を示現するあり。或は釋迦、彌陀、文殊、彌勒、觀音、勢至等の諸尊より。隨類の神體を示現するもあり。此の如く種々の因緣ありて。機の性欲に應じ。勝劣差別あるに似たりと雖も。實は是れ阿字本不生の差別智印なり。故に大日經疏に云『是の如き等の種々の因緣無數の方便を以て。普門應現して群生を敎化す。深淺不同にして。麁細異なりと雖。其實相を究むれば。秘密加持にあらざるとなし。各々能く如來の淸淨智見を開示す。若し是の如きの實相印を離るれば。餘は皆愛見の所生也。天魔外道の爲に諸の營侶と作る』と。本宗の神祇に對する觀念以て知悉すべし。

其七　字相字義

本宗は陀羅尼宗なるが故に。斯敎を研鑽し。斯道に悟入するには。先づ須く悉曇を學ぶべし。悉曇は其字數多しと雖。五十字門を以て字母と爲す。故に疏家高祖各々其義を詳釋せり。大疏及び字母釋のごとし。

今只其要を取て。 阿  嚩  囉訶 佉の五字に就て之を釋し。眞言行者字輪觀を修するの一助と爲すべし。此五字に形音義の三種あり。形と音とは常に云ふ所の如し。其義の中に字相字義の別あり。字相とは阿字の無不非。嚩字の言說。囉字の塵垢。訶字の因業。法字の等空是なり。字義とは各々字門不可得の義是なり。

阿の字義　大日經に云『阿字門は一切諸法本不生の故に』と。一切法に迷悟染淨十界の差別ありと雖。一々の法皆衆緣

より生ぜざるはなし。緣より生ずるものは。其源に遡りて。展轉推究するに。また〳〵緣より生ず。是の如く推究して無量世に至るも。また〳〵緣より生じて其本初を得ず。當に知るべし一切の生は即ち不生なるを。不生の當體即生也。故に龍猛菩薩云『因緣生の法は亦空亦假亦中なり』と。是れ緣生を壞せずして即ち不生也。不生を動ぜずして即ち緣起す。高祖云『一切法の生を見る時。即ち是れ本不生際を見る也』と。世間の凡夫は妄りに。生の一邊のみを見て。不生の義を知らざるが故に。不生解脫の中に三界の牢獄を造りて。自ら出ると能はず。若し一たび阿字を觀じて其境に透徹する時は。三界朗々として。頓に佛國土を現出せん。之を阿字本不生の義と爲す。

ㄅ囉の字義　ㄅ囉は即ち言語の義なり。若し囉の字相を見る時は。一切諸法一として言語を以て言ひ顯はし得ざるものなし。若し其字義を云はゞ言語不可得の義なり。即ち一切諸法本不生なれば。迷悟、染淨、生死、涅槃、煩惱、菩提、一々其相を離れたり。離相の實義は。言語を以て宣ぶべからず。唯冷煖自知すべきのみ。何に況や他人に向て之を言ひ顯はすに於てをや。而も言の外に無言なく。無言の外に言なし。言と無言と本來解脫せり。之れを言語不可得と云ふ。諸字之に準じて知るべし。

ㄅ囉の字義　ㄅ囉は是れ塵垢の義なり。若し囉字門を見るとき。眼根色境に對すれば。愛憎の念生じて。貪瞋痴を起し。淨心を汚がすと。恰も白衣の垢膩に漬さるゝが如し。之を字相と爲す。若し字義を云はゞ。根境相對して起る。煩惱の塵垢は

是れ皆衆縁より生じて自性なし。自性なき者は畢竟空なり之を塵垢不可得の義と爲す。

訶の字義　**訶**は是れ因縁の義なり。因縁に六因四縁あり。若し訶字門を見る時は。則ち一切諸法悉く因縁より生ぜざるはなし。之を訶字の字相とす。若し其字義を云はゞ。一切諸法は現に因縁より生じ。其因縁も亦前の因縁より生じ。前の因縁。亦其前々の因縁より生ず。是の如く過去に遡りて展轉推究するに窮盡あることなし。當さに知るべし因縁より生ずる法は最後は依なきことを。維摩經に云く『無住の本より一切法を生ず』と。之を訶の字義とす。訶字門は末より本に歸して如是の處に至る。本末異なりと雖。遂に不生に歸す。

佉の字義　**佉**は是れ等虚空の義なり。世人は無色無形無相の所を指して空とす。即ち鼻孔。耳孔。空室。空井。太虚の如き是なり。之を佉字の字相とす。若し字義を云はゞ元來彼の無色無形無相の三種も因縁無性にして畢竟空なり。畢竟空豈に更に之を空ずるの要あらんや。故に知るべし能空所空畢竟不得なることを。之を佉字の實義とす。涅槃經に『五陰滅して更に餘の五蘊を生ぜざる。是れ涅槃(小涅槃)の義なり。若し五陰本來不生ならば。何を滅してか涅槃(大涅槃)と名けん』と是れ此の謂なり。凡そ我宗に於て諸字門を釋するに遮情、表德、淺略、深秘、字相、字義、順旋轉、逆旋轉、一字攝多、多字攝一、一字釋多。多字釋一、一字成多、多字成一、一字破多、多字破一の十六玄門あり。此十六玄門の中に。上に已に字相字義を明せり。次に順

旋轉逆旋轉を明して。其他は省略に從ふ。

今順逆旋轉の相を示せば阿字諸法本不生なり。阿字諸法本不生の故に。囉字言說不可得なり。囉字言說不可得の故に囉字塵垢不可得なり。囉字塵垢不可得の故に。訶字因業不可得なり。訶字因業不可得の故に佉字等虛空不可得なり。之を順旋轉といふ。佉字等虛空不可得の故に。訶字因業不可得なり。訶字因業不可得の故に囉字塵垢不可得なり。囉字塵垢不可得の故に。囉字言說不可得なり。囉字言說不可得の故に。阿字諸法本不生なりと。之を逆旋轉と云ふ。

其八　釋摩訶衍論の梗概

一　五分の建立

釋摩訶衍論は。高祖之を三學錄に載せて。本宗所學の論藏と

爲す。是れ則ち馬鳴大士の大乘起信論を釋せる者なり。龍樹親しく馬鳴大士の意樂を受け。其蘊奥を極めたるものなれば。彼の賢首の義記の如きとは。亦同日の論にあらざるなり。此の論の釋相其の科門廣しと雖。要を取るに五分に過ぎず。一に曰く因緣分。二に曰く立義分。三に曰く解釋分。四に曰く修行信心分。五に曰く勸修利益分是なり。分に五段ありと雖。要は只大乘に於て決定の信を起さしむるに在るのみ。所謂邪定聚の人をして信を起さしめ。不定聚の人をして不退轉ならしめ。正定聚の人をして妙解彌々妙に入りて不二の果海に契證せしむ。

第一因緣分　藥は必ず病者の爲に設け。教は必ず迷者を悲んで起る。之を因緣といふ。是れ因緣分のある所以なり。此因

緣に八種あり。曰く初の一は立義分の爲めに正因緣となる。曰く次の二は解釋分の爲に正因緣となる。曰く次の四は修行信心分の爲に正因緣となる。曰く後の一は勸修利益分の爲に正因緣となる。此八種は此の論益を被むる機の差別のみ。

第二立義分　立義の一分甚だ深遠なり。横に百億の契經を攝し。竪に十論の大綱を擧ぐ。其說たらく玄の又玄。妙の又妙。不可思議不可思議なり。鶖子の智も其慮を絕し。富樓那の辨も其聲を呑む。强て名けて性德圓滿海と云ふ。または不二摩訶衍と稱す。是れ人法不二。心境不二。染淨不二。生佛不二等の無盡の法義を藏む。唯果人の了ずる所にして。因人の窺ひ知る能はざるの境なり。譬へは稀有の摩尼珠あり。其色空に同

ふして有れども無きが如く。實つれども虛きが如く。深玄純奧にして。唯天眼のみ之を照して。肉眼の見得る所に非ざるが如し。是れ不二の深法也。若し因人の爲に强て之れを開說せば。法と義との二種あり。是れ一心と三大となり。此四に各差別と平等との二法二門を開く。曰く眞如能所入。曰く生滅々能所入是れなり。之を前重の八法八門とす。然るに劣機は是に於て尙ほ未だ悟らず。故に又第三に下り更に開說して心、體、相、用、の四と爲し。心の所在を示して衆生の心是れなりと謂ふ。此の一心と三大とに又各々二法二門を開く。曰く眞如能所入。曰く生滅能所入是れなり。之を後重の八法八門とす。前重後重の法數を通計すれば三十二門なり。之を修行修因海と號す。是れ不二の法を因人のために展轉開說したる

因分可說の分齊なり。

第三解釋分　立義分は十論同一相の建立なれども。解釋分は十論各別なり。就中起信の解釋分は。後重の一心二法二門を摘りて之を釋す。此の釋相に顯示正義と對治邪執と分別發趣道相との三科あり。所謂顯示正義とは。眞如と生滅とを釋す。眞如は是れ諸法不變の體性なり。生滅は是れ眞如隨緣の義相なり。然れども。是れ一法の二義にして。遂に一心に歸す。一心とは他にあらず。即ち吾人衆生の心是れ也。之を顯示し之に契證せしむ。是れ顯示正義なり。對治邪執とは一心二門を誤解する僻習を破斥す。所謂學敎成迷の五種の人執と。怖畏生死と妄取涅槃の二種の法執とを破して。一心二門の正道に歸せしむる是れ也。分別發趣道相とは。正道を示し邪

執を破すれば。驀直に一心二門の正道に發心趣向す。所謂信成就發心。解行發心。證發心の三種を明す。之を解釋分の梗概とす。

第四修行信心分　上來既に立義解釋二分に於て。略ぼ大乘の敎理を解せり。解は行に依らざれば其妙を得ず。行は解に由らざれば其規を失ふ。轉解すれば轉行し。轉行ずれば轉解し。解行相應じて方めて其眞に契ふ。故に解釋分に次ぐに修行信心分を以てす。信心に四種あり。一に曰く眞如を信ず。二に曰く佛を信ず。三に曰く法を信ず。四に曰く僧を信ず。眞如は是れ自己本有の佛性。而も一切衆生皆之に迷ふて妄想紛起し。六趣に輪轉す。今此本性を信じて其本に歸らんと欲す。佛は是れ明悟の人。慈眼普く照し悲願均しく濟ふ。故に今之

を信じて其適從する所を知る。法は是れ所悟の體。能く衆生をして其本に還り。其道に通ぜしむ。故に今之を信じて渡海の舟筏とす。僧は是れ傳燈の人。長へに佛種を繼ぎて正法を維持す。故に今之を信じて福智を增長す。之を信心の大意と爲す。是れ修行の基礎なり。修行に又五種あり。一に曰く施。二に曰く戒。三に曰く忍。四に曰く進。五に曰く止觀是れなり。施戒忍進は常に說くが如し。止觀は是れ此論の宗要。開悟の捷徑なり。止は生而不生の理に住するの定にして。觀は不生而生の域に遊ぶの行なり。而も是の如く論ずるは。初心の人に約して云ふのみ。實は止の中に觀あり。觀の中に止ありて。止觀常に即せず離せず。以て摩訶衍の果海に流入す。又娑婆に於ける修行は。難緣多ければ。信心を退轉せんことを懼るゝ

者あり。此の者の爲に。專心に念佛することを敎へ。西方極樂世界に往生して信心不退轉ならしむ。是れ怯弱の衆生を攝取するの善巧方便なり。斯く信心を修行するは。此の分の大旨とす。

第五勸修利益分　佛心とは大慈悲是れ也。大悲の門に大小を洩らさず利鈍を擇ばず。同一佛子同一衆生なり。而も機根重々にして。千差萬別せり。怯弱劣鈍の人は。立義解釋の法門に入り難く。生信修行の分なし。若し善巧方便を施すに非ずんば。何を以てか彼等を濟度することを得ん。故に大悲門に下りて。摩訶衍の深益あることを示して。修を勸め行を勵ます。是れ此分の本旨なり。

二　三門の顯密

五分の解釋廣しと雖。之を要するに大乘三門の妙理を信解し。之に證入せしむるに外ならず。所謂三門とは一には不二門。二には眞如門。三には生滅門是れなり。不二門は即ち中道の義。眞如門は即ち空の說。生滅門は即ち有の論なり。中論に所謂因緣生法亦空亦假亦中の義是れ也。此三門の分齊を論ずるに。異解雜然たりと雖。今且く四重の釋を以て其意を盡すべし。第一淺畧の釋に依れば不二を華嚴の所謂果分不可說とし。眞如を頓敎とし。生滅を終敎とす。是れ三門並べて顯敎の分齊とするの意也。第二深秘の釋に依れば眞如生滅を以て修行修因海とす。是れ顯乘なり。不二門を以て性德圓滿海とす。是れ秘密佛乘なり。第三秘中の秘釋に依れば。眞如。不二を以て秘密とし。生滅の一門を以て顯敎とす。是れ四言と

九心とを顯敎とし。如義語と一々心とを密敎とするの義なり。第四に秘々中の秘釋に依れば。三門並に是れ密乘とす。是れ梵網の開題に依り。三十三種を開きて金剛界三十七尊の內證とす。即ち前重の八法八門を定門の十六尊とし。後重の八法八門を慧門の十六尊とし。不二の法を開きて。一心攝不二と。體大不二と。相大不二と。用大不二と。總體不二との五種とす。是れ即ち次での如く阿閦。寶生。彌陀。釋迦。大日の五佛也。之に定惠二門の三十二菩薩を加へて三十七尊とす。是れを菩提心論三十七尊の緣起と其趣を同うす。以上四重秘釋を以て。三門顯密の分齊重々なることを了知すべし。故に高祖は菩提心論と同じく。之を本宗學徒の所學と定めて。三學錄に明載せられたり。然るに本朝他宗の人師にして。往々本

論を批評し。種々の難を搆ふる者あるは。諺に所謂盲の蛇を畏れざるの徒のみ。豈に意と爲るに足らんや。

其九　教の機根

抑々機教感應の相は。能化の佛。自心中の衆生を教化し。所化の衆生は自心佛の說法を聞いて開悟す。之を機教感應の相とす。此の如く說者聽者互に因となり互に緣となりて。佛心を離れて所化の衆生なく。衆生心を離れて能化の佛なし。此中に强ひて能所被の相を論ずれば。密教所被の機。經論の施設種々に不同なり。故に先哲六科十三門を開て。之を委釋せり。今其の一二を示さん。

所被の機大別して二と爲す。一に曰く直往の機。二に曰く迂廻の機是れなり。迂廻の機とは則ち顯より密に入るの人なり。此人初め密教の何たるを知らず。其宿緣の引く所に從つて。先づ顯教に依つて發心修行し。其所期の果を證すれども。其の果至極に非れば。諸佛に驚覺せられて。密教に入り頓悟するなり。直往の機に二種の別あり。正機と結緣機と是れ也。結緣機とは。此教の勝益を現世に受くることを得ざる人なり。即ち僅に結緣灌頂を受くる類を云ふ。但し廣く密教を受けて修行すれども。現世に於て悉地成就せざる人。亦此中に攝す。正機の中に又二種あり。曰く發心即到。曰く修行成佛是れなり。發心即到は宿植深厚にして。此教を受くる言下に。頓に悟入する人是れ也。修行成佛に又三類あり。曰く頓。曰く漸。曰く超是れ也。頓機は一念一時の修行に依て。頓に斷惑證理する人なり。漸機は漸々に修行して。六無畏の階級を次第に

經て。一生成佛するの人なり。超機は六無畏の階級を超越して至るの人なり。之を密教の益を被むる機類の大畧とす。

第五章　修證門

第一節　發心受戒

其一　發心

若し善男子善女人。眞言門に入て修行せんと欲せば。當に大菩提心を發して。必ず三摩耶戒を受持すべし。菩提心は是れ眞言行者の法體。三摩耶戒は其命根なり。若し人其身體を失ひ其命根を絶たば。何事をも爲すに堪へざるが如く。眞言行者にして。菩提心と。三摩耶戒とを失はゞ。一切の修行徒設となるのみならず。還て天魔外道の眷屬と爲り。正法を破壞し衆生を損害して。永く惡趣に沈沒せん。豈に恐懼戰慄せざるべけんや。

若し人無上菩提心を發さんと欲せば。先づ須らく深心に觀察すべし。三世十方の諸佛は一切衆生の。無始よりこのかた妄想に覆はれ。三毒五欲に狂迷して自ら覺らざるを愍念し。無緣の大悲を起して。無相に相を現じ。種々の方便を以て。種種の法門を說き。常に勞苦し給ふ。其恩の高大無邊なる。知らず何を以て之に譬ふべきを。我等幸に尙ほ佛法流傳の刹に生れ。徒爾に此生を送る。豈に諸佛の大恩を顧みずして可ならんや。是の如く慚愧し思惟し。誓願して一切の惡を斷じ。誓願して一切の善を修し。誓願して一切の衆生を濟度せんとの大願を起すべし。之を發心と云ふ。發心の要又四種あり。一に曰く信心。二に曰く大悲心。三に曰く勝義心。四に曰く大菩

提心是れなり。

行者深く法性の緣起を信じ。佛法僧の勝功德を信ずべし。此信決定して疑なく惑なく退轉なきは。是れ白淨信心なり。即ち萬行の基とす。

又心を發して須らく此願を爲すべし。一切衆生は猶ほし己身の如し。又是れ我が四恩なり。然るに彼れ三惡趣に墮し。或は人天の樂に耽りて。解脫すること能はず。我れ畢竟じて彼等を濟度し盡くさんと。之を大悲心といふ。

又心を發して須らく此觀を爲すべし。外道の苦行は。邪計にして解脫を得ず。二乘は三界を出づれども。大覺を知らずして。空しく小涅槃に沈醉す。三乘一乘は敎理深く勝れて。六度萬行を修すれども。致ね次第あり。多劫を經て十進九退す。亦

吾が樂ふ所に非ずと。此の如く諸敎を簡擇して劣を捨て勝に進む。之を勝義心と云ふ。

又心を發して此願を爲すべし。我れ今阿耨多羅三藐三菩提を求めて。餘の外道及び二乘等の劣果を求めずと。此心決定する時は。十方の諸佛現前して之れを証知し。諸魔之を覩て震動す。之を大菩提心と云ふ。是れ此の四種の心は眞言行者發心の相なり。因より果に至るまで時として暫くも忘るゝこと勿れ。

其二　受戒

行者既に大菩提心を發さば。當に三昧耶戒を受くべし。此三昧耶戒大別して三種とす。一に曰く攝律儀戒。二に曰く攝善法戒。三に曰く饒益有情戒是れ也。攝律儀戒に在家、出家の別

あり。在家は三歸、五戒、八齋戒是れ也。出家は沙彌、沙彌尼の十戒。式叉摩那の六法、六隨法。比丘の二百五十戒。比丘尼の三百四十八戒等是れ也。攝善法戒饒益有情戒とは。梵網の十重。四十八輕戒。及瑜伽の四重、四十三輕戒等是れ也。此の後二戒は。在家、出家に通ず。是の如く三昧耶戒に三聚の差別ありて。諸戒を具すと雖。通じて其體を論ずれば十善を出でず。十善とは所謂不殺生。不偸盜。不婬欲。不妄語。不綺語。不惡口。不兩舌。不慳貪。不瞋恚。不邪見の身三、口四、意三也。高祖の三摩耶戒儀の序に云く『一切衆生を觀ずるに。猶ほし己身及び四恩の如し。是故に敢て其身命を殺害せず。(不殺生戒)衆生を觀ずるに猶ほし己身の如し。故に敢て其所有の財物を奪盜せず。(不偸盜戒)衆生を觀ずるに猶ほし四恩の如し。故に敢て淩辱汚穢せず。(不婬欲戒)衆

生を觀ずるに己身四恩の如し。故に敢て欺誑せず。(不妄語戒)衆生を觀ずるに猶ほし己身四恩の如し。故に敢て雜穢語を以て調戲せず。(不綺語戒)衆生を觀ずるに己身四恩の如し。故に敢て麤惡語を以て罵言せず。(不惡口戒)衆生を觀ずるに己身四恩の如し。故に敢て離間語せず。(不兩舌戒)衆生を觀ずるに己身四恩の如し。故に敢て所有の財色を貪求せず。(不慳貪戒)衆生を觀ずるに己身の如し。故に敢て前人を瞋恚せず。(不瞋恚戒)衆生を觀ずるに己身の如し。故に敢て愚癡の心行を起さず。(不邪見戒)是れ則ち大悲行願に由るが故に。自然に十不善心を離る。十不善心を離るれば。即ち是れ調伏の戒なり。(攝律儀戒)其惡心を離るゝに由るが故に。心中に清凉寂靜を得。是れ則ち攝善法戒なり。乃至此乘に住するものは。此戒を以て自の身心を撿知し。他の衆生を教

化す。即ち是れ秘密三昧耶佛戒也』と。此文理に由て之れを觀るに。三昧耶戒は止惡修善の大小諸戒に通ずること明瞭なり。然るに今人動もすれば。此の戒を誤つて造作に亘らざる無爲無作とのみ解して。有部四分等の七衆戒とは全く別物視せり。是れ無爲の名に迷ひ無作の義を執するの致す所なり。元來三昧耶戒の攝律儀は。聲聞の制に異らず。之を律儀一戒不異聲聞と云ふ。故に高祖此意に基き。有部の諸律を三學錄に列ねて。眞言宗徒の所學とし。南都受戒を誡勗するもの。良に由る。あり。又梵網の戒は金剛智、不空、高祖、共に金剛頂經の淺畧とし。眞言行者持つ所の三昧耶戒の行相とす。學者宜しく奉持すべし。是れ私論にあらず。高祖の嚴誡凛として今尙ほ耳に響くものあり。曰く『是の如く顯密の諸戒具足せざ

れば慧眼暗冥なり。此意を知りて眼命を護るが如く。寧ろ身命を棄るとも此戒を犯すこと莫れ。若し故らに犯す者は佛弟子にあらず。金剛子にあらず。蓮華子にあらず。菩薩子にあらず。聲聞子にあらず。我弟子にあらず。我も亦永く共に住して語せず。往き去れ住まること莫れ。往き去れ住まること莫れ』と。

第二節　練行

既に發心受戒し終らば。須らく練行して戒體を長養し。三身の妙果を要期すべし。高祖又云『諸の近圓求寂近事等。此戒を奉行し。本尊の三摩地を精修し。速に三妄執を超えて三菩提を證し。二利を圓滿し四恩を拔濟せよ』と。其練行の相は。印度支那には直に經軌に依て修行するが故に。始めて密教に入

る時。先づ持明灌頂に浴し。後ち投花得佛の一尊法を修行し。又餘尊の悉地を樂欲するあれば。重ねてその尊の灌頂を授けて。之を修行せしむ。此の如く。次第に諸尊を遍學し終りて後。其師位に堪ふるや否やを察して。爲めに阿闍梨位灌頂を授く。之を傳法灌頂と云ふ。本朝小野廣澤の諸流に傳襲せる四度加行は。源と大師の傳授秘記より起れり。此秘記は金胎両部の大法を受學するを以て。諸尊を遍學するに充つ。故に両部を受學し。護摩を修し終れば。傳法灌頂を授けて阿闍梨位を與ふ。但し秘記に示す所の修行たるや。近代の加行とは。大に其轍を異にし。輕々しく傳授せるものに非さりしことを知らずんばあるべからず。必ず先づ十八道次第を授けて。悉地成就を期し。其悉地を得るに隨て兩部を順次に之を授

けたるなり。法を修して實地を蹈むの狀。以て想見すべし。或先哲嘆息して曰『大師の遺勅の如きは。則ち生年五十に滿ちたらん者に。傳法の師位を許し授けよとなり。今は齡の老少を論ぜず。唯即身成佛義を講解し。三大の大旨を了達して。縱令他人來りて詰難すとも。敢て屈撓せざらんを準と爲せ。斯の如き者未だ遍學せずと雖。是れ遍學に堪へたるなり。若し未だ好く成佛義を解することを能はざる者は。縱令已に遍學すとも唯々記誦のみ。何ぞ一多無礙涉入自在の境界に在らんや。また何を以て大日尊に代りて度生の事を行ずることを得んや』と。此語大に服膺すべきに堪へたり。故に特に之を引て敢て後學に諗ぐ。

諸尊の三摩地を遍學修行する。之を五部の秘觀三密の妙行

と云ふ。所謂、佛部、金剛部、寶部、蓮華部、羯磨部の諸尊法是れなり。此三摩地門は。本宗の師資嫡傳にして。餘教に嘗て談せざる所。其の詳らかなることは。入室面授にあらざれば示すことを得ざるなり。故に今相承の文を引いて五部に通ずる略觀のみを示さん。曰く『先づ本尊を觀じて壇上に安置し。次に觀ずべし。吾が身は即ち印契。語は即ち眞言。心は即ち本尊なりと。是の三密平等々々にして。法界に遍ぜり。是れを自らの三平等と名く。吾が三平等と。本尊の三平等と。同一緣相なり。是れを他の三平等と名く。只本尊と。吾が三平等と。同一緣相なるのみにあらず。已成未成の一切諸佛の三平等も。亦同一緣相なり。是れを共三平等と名く。同一緣相の故に。諸佛を引て吾が身中に入る。是れを入我と曰ふ。吾が身を引て諸佛の

身中に入る。是れを我入と曰ふ。入我我入の故に。諸佛三無數劫の中に。修集する所の功德。我身に具足し。又一切衆生の本來自性の理と。吾れ及び諸佛の自性の理と。平等にして差別なし。而も衆生は知らず覺らずして。生死に輪廻す。茲れに因て。我れ衆生の爲に悲愍を發すとき。吾が修する所の功德。自然に一切衆生の所作の功德となる。是れ則ち利他の行なり。眞言行者當さに一切時に恒に斯の觀を作すべし』と。是れ吾が宗の行者何れの尊の法を修行するにも。一切時に必ず忘るべからざるの觀相なり。故に此の祖訓を掲げて行者の龜鏡に備ふ。求佛の客常に之を心地に印して。時として暫くも忘るゝこと勿かれ。元來練行は實踐躬行に在りて。推理論覈を要せず。然るに尙ほ語を長うする所以は。亦竊に憂虞すべ

き者あるを以てなり。何ぞや曰く。今時修行を輕んじて事とせず。徒らに教相學のみに傾くものあり。或は其教相學をも輕んじて。將さに世間普通の學術のみに趣くものあり。遂に出家の素願を忘れ。密宗の本旨を知らざるに至るもの。滔々たる天下皆是れなり。宗風の振はざる。人材の出ざる。豈に其所由なからんや。豈に其所由なからんや。

第三節　所得の三品悉地

既に觀行成就すれば。必ず三摩地現前す。譬へば響の聲に應ずるが如く。水に月の映るが如し。而も行者の性欲各別にして。能求の心行。三種あれば所得の悉地。亦隨て三品の別を爲す。三とは何ぞや。曰く上中下是れなり『上は則ち密嚴佛國土』と。是れ現身に法佛の土を開顯するなり『中は則ち十方淨土』

と。或は西方の如き報身報土あり。或は都率の如き應身應土ありて。若は現身に往生し。若は順次に往生す『下は則ち諸天修羅窟』と。或は天上に生れ或は修羅窟に入るの類。是れ等流身の國土に往詣する也。是の如く三品悉地は。世間。出世間。現在。未來の不同ありと雖。その三品四身の土は是れ因緣所生にして。幻の如く。陽焰の如く。乾闥婆城の如く。其体畢竟無性にして不可得也。而も其一々の土は。宛然として壞せず。斯の如く觀察すれば。三品の悉地は。行者の性欲に順ひ。四身の國土を分つと雖。是れ無淺深の淺深なれば。一門即普門にして萬德輪圓せり。故に三品の悉地。共に即身成佛なると疑なし。

第四節　十緣生句の觀門

經に云『秘密主若し眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は。

十緣生句を深修し觀察して。當さに眞言門に於て通達作證すべし』と。此十緣生句の觀は。眞言行者因より果に至るまで。緣に觸れ境に對して此觀を爲し。情執を打破し。不生の心地に達するの善巧方便なり。又諸佛は十緣生句を以て。獅子吼して。諸法實相印を說けり。若し能く之を信解し觀察すれば。世間の利衰毀譽稱譏苦樂の妄風。吹き來れども動せず。縱令ひ十方世界の魔波旬。悉く身を變じて佛形と現はれ。相似の般若を說き。行者を嬈乱せんとするとも。其心を奪ふこと能はず。夫れ道愈高ければ魔も亦愈盛んなり。密乘修行の者。知らずんばあるべからず。十喩とは所謂幻と陽焰と夢と影と乾闥婆城と響と水月と浮泡と虛空華と旋火輪と是れなり。此十喩は上無盡の佛界を窮め。下無盡の衆生界を盡くし。中

に於て有らゆる一切諸法。了々觀察するに。皆緣より生ずるを以て。即空、即假、即中なりと達せしめんが爲に。此譬喩を以て觀行を助くるなり。

幻　とは古來印度に行はれたる一種の術にして。或は咒術或は藥力を以て。時に人馬往來等の狀を現じ。時に佛菩薩神通變化等の相を顯はし。恰も十方に往來するに似たれども。其實。往にもあらず。來にもあらざるが如し。當さに知るべし諸法の緣生無性なることも亦然るを。

陽焰　とは日光赫々たる時。曠野の中に於て。風塵埃を吹き颺ぐるが故に。忽ち流水の奔るが如きを見る。渴鹿、野馬の類之を以て水と爲し。走りて之に趁くも。遂に其實體を得べからざるが如し。當に知るべし諸法も亦然るを。

夢　とは人の睡眠の中に於て山川聚落を見乃至怨親の境界を見て或は喜び或は怒り或は愛着し或は怨恨し時に樂欲を起し時に恐怖を生じ種々の苦樂を受く而も醒め了りて都て所見なきが如し當さに知るべし諸法の緣生無性なることも亦然るを。

乾闥婆城　とは旭日の始めて昇る時空中に於て城門樓閣宮殿現はれ人馬雜蹈往來出入の狀を見れども日轉高ければ轉滅するが如し當さに知るべし諸法の緣生無性なることも亦然るを。

響　とは深山幽谷の中に入り或は空洞大厦の中に在りて高聲に獨り語するに他に人あるが如く呼べば則ち呼び罵れば則ち罵り嘲れば則ち嘲り笑へば則ち笑ふ而も皆是れ

自己の音聲相擊つて響を生ずるのみにして更に人あるに非るが如し當さに知るべし一切言語の緣生無性なることも亦然るを。

水月　とは水中に映れる月影の捕捉すべからざるが如く。

浮泡　とは雨水の滴(したたれ)の大小に隨て種々の浮泡を生ずるも其實體なきが如く虛空華とは人の眼病に依て虛空に華の如きを見るも病愈ゆれば所見なきが如く旋火輪とは小兒の戲れに手に火燼を採りて空中に旋轉するに方圓三角大小長短の相貌意に隨て現ずれども其實體なきが如し當さに知るべし一切諸法は心に隨つて變現して其實體不可得なることも亦復是の如きものなるを之を十緣生句の觀と爲す若し眞言行者本尊の三昧を修し其尊現前する時も其境

界に着すれば。有所得に隨して諸魔便りを得ん。其時行者須らく自ら知りて。此十緣生句の觀をなすべし。謂く此境界は自より生ずとせんや。他より生ずとせんや。共より生ずとせんや。無緣より生ずとせんや。若し本尊の三密能く此境界を現ずと云はゞ。則ち行者未だ修行せざる時も。本尊の大悲は平等なり。何が故に成就せしめざるや。若し自の修行能く此境界を現ずと云はゞ。何に依てか本尊の三密を觀じて加被を求むるや。若し共より生ずと云はゞ本尊と行者と自他已に不生なり。豈に此の不生のもの合して生ずる理あらんや。中論に云く『諸法は自よりも生せず。亦他よりも生せず。共ならず無因ならず。是の故に知ぬ無生なり』と。以て今の十緣生句の觀を意得すべし。

第五節　不斷而斷の妄執

既に屢〻論じたるが如く。斯教の宗要は。唯諸法本不生の外に惑智の差別を見ず。煩腦即菩提なれば斷證を勞すること無し。生死即涅槃なれば。生佛の間隔あることなし。然も強て斷證の相を論ぜば。且く四重を以て諸義を該收すべし。

初重に曰く諸惑多けれども。攝して三妄とす。所謂。初劫麁妄執。第二劫細妄執。第三劫極細妄執是れ也。麁妄執とは人執なり。謂く五蘊無我の法に對し。妄りに神我を執するが如きを云ふ。細妄執とは法執也。五蘊の當體無生皆空なるを知らず實有なりと執するの類是れ也。極細妄執とは事理不二。生佛一如の理を悟らず。妄りに隔執する微細の惑なり。此の如く三妄に麁細の差別あり。之を斷ずる時は。麁惑前に斷じ細惑

後に斷ず。譬へば鏡を磨くに。麁垢先づ去つて細垢後に除くが如し。是れ常途淺畧の斷相なり。第二に曰く。自宗の斷相を論ぜば。麁妄人執は佛部の功德と顯はれ。細妄法執は。蓮華部の功德と顯はれ。極細妄執は金剛部の功德と顯はる。則ち是れ三妄即三部の義にして。前後あることなし。天台の見思。塵沙。無明の三惑同時斷と立つる意も亦此の類也。第三重に曰く。妄執を麁細に分ち。三劫と立つるは寄齊門なり。宗の實義は一無明の外に餘惑あることなし。謂く實の如く自心を知る時。不如實知の無明。忽爾として金剛薩埵と顯はる。是れ瑜祇經に示す所の一智一斷の深義なり。第四重に曰く。前重に一智一惑を立つるは。甚深なれども。惑智の差別を見るは。尙ほ教門の範圍を出でず。實修實證門の意は諸法本不生の外

に。餘法の斷証すべきものなし。法々皆本不生なり。豈惑智迷悟の別あらんや之を不斷而斷斷而不斷の妙旨とす。

第六節　無階の階級

其一　六無畏

凡聖迷悟其體を觀ずれば。一々六大法界にして。常に無礙せり。其相を論ずれば。四曼不離にして。聖は凡を離れず。凡は聖を離れず。輪圓具足せり。其用を論ずれば。三密加入して。佛の三密と衆生の三密と互ひに攝持せり。此の如く生佛無碍一味一相なり此間豈に階級の設くべきあらんや。然れども平等即差別の故に無階の處に。階級を設け。無差別の中に。差別の相を立つ。即ち六無畏十地三句五轉是れなり。

謂ゆる直往の眞言行者。三密の觀行を修して斷惑證理する

淺深を。八心三劫に約して對明す。之を六無畏と云ふ。

第一善無畏　三歸、五戒、十善、八齋戒等を受持して。人天の中に生じ。三途の苦を免るゝを以て。其心泰然として畏るゝ所なし。若し眞言行者晝夜に精進せば。三密供養行を修する位之と齊し。是れを善無畏と云ふ。

第二身無畏　聲聞の四念處觀を爲す時。此身は三十六物の不淨聚なりと觀じて。穢相現前し。自他の身に於て貪愛を生ぜず。又受は苦なり心は無常なり法は無我なりと觀じて。四種の顚倒を離れ身の厄縛を解脫し。畏るゝ所なし。若し眞言行者。前の觀行力に依らば。本尊の三昧現前して。有相の悉地を得る位之と齊しきなり。

第三無我無畏　唯蘊無我を觀ずる時。五蘊一々に分析推究して。色の極微。心の刹那に至るも。更に我性の見るべきなく。乃至湛寂(人空)の心を證して。人我の厄縛を離れて。畏るゝ所なし。若し眞言行者。本尊の境界現前の中に於て。心不可得なりと觀じて。愛慢を生ぜざる位之と齊しきなり。

第四法無畏　行者已に人我を離るれども。尙五蘊の體實なりと執す。之を對治せんと欲して。幻焰等の十喩を以て。五蘊即空なりと觀じて。違世と順世との八心を超へ。寂然界を證して。蘊の厄縛を離れ。法執に於て惑ふの畏れなし。若し眞言行者定中所現の境界は。皆是れ因緣の所生にして。其實性無きこと恰も鏡像水月の如しと覺る位之と齊しきなり。是を法無畏と云ふ。以上の三は三劫の中の初劫に對明するなり。

第五法無我無畏　無緣乘の心を以て。萬法は皆是れ心の變

作なりと觀じて境空を證し。又諸法は緣生無性なりと解して。心の本不生を覺り。こゝに法執の厄縛を離れて。畏るゝ所なきにいたる。若し眞言行者。瑜伽の境界に於て。十緣生句を觀じて。有空無礙を證する位之と齊しきなり。是れを法無我無畏と云ふ。即ち第二刼に對明す。

第六一切法自性平等無畏　前に既に萬法唯心の理を觀ずと雖。未だ本末の隔を離るゝに至らず。此處に來りて觀解愈〻熟して。心唯是れ諸法。諸法唯是れ心なりと觀じて。縱横一異の執を離れ。諸法の自性は。等しうして无尋なりと達して。有爲無爲の隔歷を離れて。安然更に寸毫の執を留めず。眞言行者虛空無垢の菩提心を開發する時。迷悟染淨畢竟無相なりと証して。心垢盡き。戲論息むの位。之と齊しき也。これを第六

の無畏といふ。即ち第三刼に對明す。

以上六無畏は。直入の眞言行者の經る所なり。然れども心は無形無相なれば。且らく常途の外迹に擬して。內證の淺深を明す。是れ菩提心運々倍增して。初地に達するの善巧方便なり。

其二　十地

第一歡喜地　初めて無漏の聖性を得。具さに人法二空を證し。能く自他を利益して。大歡喜を生ずるが故に歡喜地といふ。

第二離垢地　三聚淨戒を具足して。微細の戒をも犯ずるの心垢を離るゝが故に離垢地といふ。

第三發光地　勝定を成就して。能く無邊の慧光を發すが故

に發光地といふ。

第四焔慧地　最勝の菩提分法に安住して煩惱の薪を燒き智慧の焔爲に益々光を增す故に焔慧地といふ。

第五極難勝地　眞俗二智は差別と平等の不同ありて互に相違せり今之を相應せしむ其智極めて難勝なるが故に極雜勝地といふ。

第六現前地　此地に於て十二緣起を觀じて巧みに無分別の最勝般若を現前せしむるが故に現前地といふ。

第七遠行地　無相に住する功用凡夫二乘の有空の行を遠離するが故に遠行地といふ。

第八不動地　無分別智任運に相續して有相と有功用と煩惱とに動せざるが故に不動地といふ。

第九善慧地　微妙の四無礙辯を成就して能く十方に遍じて巧に法を說くが故に善慧地といふ。

第十法雲地　大法智の雲衆德の水を含んで無量の功德を生じて一切衆生を潤益するが故に法雲地といふ。

十地の名義に淺畧深秘の兩意あり淺畧の邊は常途顯敎と大同なれば今顯論を引て其名相を示す故に十地の位々每に檀戒等の各一波羅密を成就するの意なり次に深秘は宗の實義にして初地と十地と高下なきが故に各々の位々に各々の十波羅密を成就す是れ位々に萬德を具足するの義なり之を菩提心十轉開明の功德とし或は阿等の十二轉とし或は四佛の位とし或は開て十六大菩薩生とす故に十六大菩薩生と十地とは只開合の不同のみにして其義一也所

謂初地は金剛薩埵にて。王愛喜の三菩薩之に攝す。二地は即ち寶菩薩。三地は即ち光菩薩。四地五地は即ち幢菩薩。六七兩地は笑菩薩也。八地は法利二菩薩とし。九地は因語の二菩薩なり。十地は即ち業護牙拳の四菩薩也。故に高祖の釋に云『心也法門也佛也菩薩也。凡そ餘乘に異ること此の如し』と。是の如きの十地は。只是れ十個の阿字なり。故に初地と云ふも。二三に對するの名にあらず。本初不生の心地を證するに名づく。是れ金剛薩埵の內證也。又諸佛の體性也。故に知りぬ此位に於て頓に自證圓極せることを。然らば則ち二地以上は只初地の總德を別開するのみにして。別に異れる德相あるにあらず。經に『無對無量不思議の建立』といふ。即ち是の意也。

其三　三句と五轉

三句五轉　は。菩提心轉昇の始終にして。眞言行者因より果に至るの階級なり。中に就て三句は。自性法身の大日尊。法界宮に在して。之を廣敷し。變化法身の釋迦如來。菩提樹下に於て之を傳說す。故に大日經に云『秘密主佛に問て言さく。世尊云何んが。如來應共正遍知一切智々を得たまふ。彼の一切智智を得て。無量の衆生の爲に。廣演分布し。乃至是の如きの智慧は。何を以て因とし。云何んが根とし。云何んが究竟とする。大日尊答へたまはく。菩提心を因とし。大悲を根とし。方便を究竟とす』と。菩提心とは自ら覺り他を覺らしむるの大心。即ち是れ勝義。行願。三摩地の三德を具するの名也。又是れ白淨信心の義なり。所謂自己に本來佛性を備ふることを決定信知して。疑惑の心を離れて。實地に之を開顯するの修行を發

起せしむ。これ菩提心なり。これ白淨信心なり。此の心をして、益、增長ならしめんが爲に。三密六度の大悲萬行を以てす。且く行者本尊供養行を修する時に就て云へば。香花等の供具を捧ぐるに。一色一香皆緣生無性にして。即空なり即假なれば。一々法界に遍滿して。上十方の諸佛を供養し。下無盡の衆生を濟度して。同じく第一實際に歸せしむ。是の如きの大悲萬行に依て。菩提心十方法界に於て根芽を生じて。堅固不拔となる。之を大悲爲根とす。此大悲萬行の方便に依て。成ずる所の果を方便爲究竟と云ふ。斯く自利々他圓滿せる位。之を三密醍醐の妙果と稱す。又此三句の相に就て。金剛手菩薩。如來に對して。菩提心性、菩提心相、心續生等の九句を問ふ。如來其問ひに答へて經の終りに至る。知るべし。大日經七軸三十

六品ありと雖。三句を展轉開說するに外ならざるを。又此三句を開て五轉とす。

五轉　とは。曰く發心。曰く修行。曰く菩提。曰く涅槃。曰く方便是れ也。これ即ち前の方便爲究竟の句より。菩提、涅槃、方便の三轉を開くのみにして。餘の二は三句の建立に異ることなし。謂はく心自ら心の菩提を求め(一)心自ら心の萬行を修し(二)心自ら心の正覺を成じ(三)心自ら心の涅槃を證し(四)心自ら心の方便を起し。心の衆生を成就し。心の佛土を莊嚴す(五)是の如く因より果に至るまで。皆無所住にして。而も其心に住するなり。

古來此五轉の建立に。中因と東因との二義あり。中因は本有より修生に轉起する本修合論の次第也。東因は修生より本

有に歸入する唯修生の建立也。前者は不空三藏の傳にして。高祖秘藏記に於て。之を圖解せり。後者は善無畏三藏の傳にして。大日經疏の中に詳釋あり。今圖を以て。二傳の異を示さん。

中因

東因

是の如く中因と東因との建立は一往異なりと雖。遂に一揆に歸す。所謂中因は本覺より始覺に顯はるゝ緣起にして不生而生の義なり。東因は始覺より本覺に還同するの次第に

して生而不生の趣きを示すのみ。畢竟ずるに本覺始覺は一覺の體用にして同じく是れ一大法身に歸す。

第七節 無盡の悲願

三世十方の一切如來。自證若し滿ずれば必ず化他に出づ。虛空無邊なれば世界海無盡なり。世界海無盡なれば。衆生界も亦無盡なり。衆生界無盡なれば。吾が願海も亦復無盡なり。無盡の願海の中に吾れ今發心す。誓て佛道に趣向するも自ら寂滅を取らず。必ず當さに一切衆生を濟度し盡くすべし。縱令虛空竭き世界盡くることありとも。一人の未だ發心せず。已に發心すと雖。未だ修行せず。已に修行すと雖。未だ證得せず。已に證得すと雖。小に着して未だ大を樂はず。已に大乘に入ると雖。未だ密乘を知らず。已に密乘に入ると雖。未だ即身

成佛せざる者あらば。吾が願海未だ盡きざるなり。之を無盡の悲願と云ふ。普賢行願品に云『諸佛如來大悲心を以て體と爲す。故に衆生に因て大悲を起し。大悲に因て菩提心を生じ。菩提心に因て等正覺を成ず。是故に菩提は衆生に屬せり。若し衆生無んば。一切の菩薩。無上正覺を成ずること能はず。菩薩是の如く衆生に隨順し。虛空界盡き。衆生界盡き。衆生業盡き。衆生煩惱盡くとも。我が此の隨順は窮盡あること無く。念々相續して。間斷あること無し。身語意業疲厭あること無し』と。普賢の行願豈に別人の境界ならんや。

第六章　結論

釋尊云『四十九年一字を說かず』高祖云『文は是れ糟粕。文は是れ瓦礫』孔子曰『予言ふこと無からんと欲す』孟子曰『予豈に辯

を好まんや』と。亦甚だ奇なり。亦甚だ奇なり。蓋し釋尊樹下成道の曉より。提河涅槃の夜に至るまで。口を開けば則ち百億の契經と爲り。足を擧ぐれば則ち八萬の化儀と爲る。豈に稱して以て說かずと言ふことを得んや。高祖は日域の釋迦を以て聞ゐ。孔孟は漢土の聖賢を以て顯はる。豈に其文を殄滅し。其言を塞ぎ其辨を杜づるを得んや。然るに先聖後聖異口同辭其言ふ所此の如し。亦甚だ奇ならずや。予退て竊に鑑み。聖賢の一言一行敢て苟もせざるを知り。喟然として自ら嘆じ。悚然として自ら畏れずんばあらず。古に云『終日行じて未だ曾て行せず。終日說きて未だ曾て說かず』と。夫れ此を謂ふ乎。予頃日子弟の敎養に際し。感あり。乃ち古訓に稽へて。宗の要旨を探ぐり。偶々此一小篇を成す。一宗の綱要。高祖の遺志。豈

に敢へて悉く收め得たりとせんや。冀くは文辭の拙劣を咎めずして之を繙く者あらば。未だ必ずしも童蒙に補無くんばあらず。夫れ言說文字は以て道を載する所以。又道を覆へす所以。決して匆々爾なることを得ざるなり。纔に敎相の一端を攻めんとするも。其大體に通じ其妙理を極めんと欲せば。優に十年二十年の螢雪を經ざるべからず。況んや眞正に秘密佛乘に入り。瑜伽の大法を修得せんと欲する者をや。豈に小機小根小願にして。彼岸に到達することを得んや。須らく大菩提心を起して。善知識を求め。道心永く退轉せず。高祖の心を以て其心とし。高祖の行を以て其行とし。高祖の言を以て其言とし。高祖の服を服し高祖の位に登るべし。斯の如きの大丈夫兒ならば顯敎密敎三乘一乘の經卷論藏と雖。只

是れ一擔の閑家具のみ。況んや區々たる著作の如き。豈に斯人の耳目に觸るゝに足らんや。寔に目睫の塵埃にして啼兒を止むるの黃葉にも値ひせざる也。然りと雖。一滴亦是海水。一斷亦是黃金。因緣無量性欲無盡。或は一個半個此篇を以て發心の階梯と爲す者無きにあらず故に亦甚だ屈撓せず、焉。高祖云『蓋し言ふべきを言はざるか。言ふまじきを之を言へらん。失が知人斷せんのみ』と。敢て此篇を結ぶの辭に代ふと。云爾。

明治三十七年十月十日高野山眞別處圓通律寺に於て之を草し畢る

苾芻 隆應

眞言宗綱要 終

明治三十八年三月十日印刷
明治三十八年三月十五日發行

定價三十五錢

著者　和歌山縣伊都郡高野村字高野山二百六番地　浦上隆應

發行兼印刷人　和歌山縣伊都郡高野村字高野山百三十四番地　杉本孝順

印刷所　東京市淺草區黑船町二十八番地　東京並木活版所

發行所　和歌山縣伊都郡高野村字高野山百三十四番　眞言宗聯合大學黌

版權所有

特約發賣店

東京市麻布區飯倉町五丁目　森江
東京市本郷區春木町二丁目　森
和歌山縣伊都郡高野山　前

711
10

319
109

017052-000-1

319-109

真言宗綱要

浦上　隆応／著

M38. 4

ABE-0335